

勘。

めもちょう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

勘に生かされてきた少年が、勘を利用して目的を達成しようとする話。

※他サイトで書いていたものを転載したものです。（そちらは閉鎖済み）

※完結はしません。

※アンチ・ヘイトは念の為です。

目次

プロローグ	1
1、少年は団員になりたい。	3
2、少年、試験を受ける。	8
3、試験結果と、合否。	12
4、生意気子供と大事件。	16
5、最強の味方はパンダなのか、狸なのか。	20
6、勘が働けば、他は見えなくなるらしい。	26
7、探索者に降りかかる災難。	29
8、警察沙汰から年下を守りたかった。	34
9、頼りにならない警察と己。	38
10、彼の勘は閃きではない。	42
11、推理は整理、勘は無計画に。	46
12、やがて勘は彼に思考させる。	50
13、秘密部屋に押し込まれていたのは。	53
14、言い訳野郎はついに覚悟する。	56
15、疲れは後からやってきた。	62
16、励まし隊と、トラウマ君。	66
17、彼は普通の少年なのだ。	70
18、衝撃には衝撃を。	75
19、当たらずも遠からず。	79

プロローグ

夜中、激しいビル風が吹き付ける中、少年は黒い服装を身にまとい、地味な色に塗られたクロスバイクに跨がっていた。

遠くでは、人々の歓声やヘリコプターのプロペラ音、警察のパトカーのサイレン音が混じり合い、騒音となっている。

「毎度のことながら、うるさいな……」

少年は人通りのない道路で一人、そう愚痴りながらフルフェイスのヘルメットをかぶる。これで少年の顔は見えなくなった。

なぜ、少年はこんなことをしているのだろうか。何が目的なのだろうか。

その問いに答えるのならば、まずこの数日の間に起こった出来事について話さなければならぬ。

数日前、米花町ではとある美術館が宝石展の開催を予定していた。そこへ、怪盗キッドの予告状が届いたのだ。

そこで開催を中止にすればよいものを、宝石展の開催者が無理やり決行することにしたのだ。なんでも、良い宣伝になると考えたらしい。盗られてしまったては意味はないのだが、防犯システムに自信があるらしく、警察が言っても聞かなかつたらしい。

そして宝石展開催二日目、つまり予告状当日。警察も協力し、万全の防犯体制で怪盗キッドを捕まえようとしていた……という訳だったのだが。

「けつきよく今日も捕まえられなかつたんじゃん。宝石も盗まれちゃって、警察も開催者も散々だね」

少年は耳から下げているイヤホンを通じてラジオを聞いていた。ラジオからは怪盗キッドが見事宝石を盗み出し、美術館から逃げ出したという中継が流れている。

警察も防犯システムも申し分ない。むしろ普通なら逃げることは不可能に近い。しかしそれでも捕まえられないのは、ひとえに、怪盗キッドの方が一枚も二枚も上手だからという他ない。

遠くに聞こえていたサイレン音がさらに遠くに行ってしまった。

少年は苦々しく大きく舌打ちする。

「相変わらず無能だな、警察は!!」

少年は瞳を怒り狂った猛獣の如くぎらつかせ、クロスバイクで走り出した。

少年は予告状の内容も、今回狙われた宝石のことも何も知らないし、本人は知りたがってもいない。別に宝石に興味がある訳ではないのだ。

では何故こんなにも、飢えた猛獣のごとく怪盗キッドを追いかけるのか。

それはただ単に、恨み、憎しみ、嫉妬がそこにあるからだ。

「今日こそ捕まえるぞ、怪盗キッド!」

少年がクロスバイクで走る先に、ジェット噴射をするローラーシューズのような機械で逃走する怪盗キッドが現れた。怪盗キッドは驚いたのか、少年を見て少しバランスを崩したが、これまで幾度となく追いかけてきた少年に慣れていたのである。すぐに少年との追いかけてつこを楽しむように、少年をチラリと振り返る余裕まで見せた。

何故キッドが現れるであろう場所に少年は待ち伏せすることができたのか。それはひとえに、少年の「勘」が良いから、としか言えない。

「待ちやがれ! 怪盗キッドオオツ!!」

1、少年は団員になりたい。

よく晴れた昼下がりに。直也は友人たちと駄弁っていた。給食を食べたあとのこの陽気は心地良く、眠気を誘う。

「なー直也、足もう大丈夫なのか？次、体育だぜ？」

「んー？ ふーあつ、うん、もう大丈夫だよ。サッカー早くやりたいねー！」

「そうだねー！」

そう駄弁る間にも直也は小さくあくびを繰り返す。それに続くように友人2人も順番にあくびをする。伝染ったのだろうか。少し間を空け、3人で笑った。

「眠くなるよねー、今日あつたかいから」

「うん、何か面白そうなことがあれば起きるのにねー」

「面白そうなこと、ねえ」

相変わらず楽しいこと好きだねーと笑う友人の楓太に対し、もうひとりの友人、泰輝は思案顔をしていた。

「えー！ 何かあるの泰輝？」

「ん？ ああ、そう！ 最近、1年B組の何人かが、『少年探偵団』、なんてものを結成したって聞いてさ」

「えー!? なにそれおもしろそー！」

神崎 直也は楽しいこと、面白いことが好きだ。全力で楽しむ為なら、努力を惜しまない節がある。

「ま、大体が犬とか猫とかを探す手伝いをしてる感じらしいけどな」

「僕为天職じゃん、楽しそー！」

「えー？ ただ探し物をするだけなんてつまんないよ」

「そんなことない！ 絶対楽しーよ！ よし!!」

「え、まさか直也？」

そしてその行動力は、とても速いのである。

「僕、少年探偵団に入る！」

楓太は溜め息をつき、泰輝はやっぱりな、と笑った。

「光彦、歩美、コナン、灰原、帰ろーぜ！」

「はい、今日は帰ったら何しましよう？」

「歩美、博士の家でゲームしたーい！」

「そういうえば、新しいゲームができたって言ってたわね」

「本当、哀ちゃん！　じゃあそれで決まりだね！」

放課後の帝丹小学校1年B組では、噂の少年探偵団の5人が帰ろうとしていた。

「じゃあいったん帰って、それから博士の家に集合な！」

少年探偵団の1人、小嶋　元太が言うと4人も賛同の声を上げる。

ランドセルを背負い、教室から出ようと大きな黒板の方の扉に近づいた時だった。

「たのもー!!」

コナンたちが出ようとした扉の反対側から、上級生らしき少年が大声をあげながら入ってきた。教室に残っていた生徒はその大声に驚き、固まっていたが、少年はそれに気づいていないのか、そのまま近くで固まっていた女子生徒に声をかけた。

「ねえねえ、このクラスに少年探偵団の人達がいるって聞いたんだけど、今いる？　もう帰っちゃった？」

「え？　あ、ううん、いるよ。あの子たち……」

女子生徒は困惑しながらも答え、今まさに帰ろうとしていた元太ら5人を指差した。

「なんだおめー、あ！　もしかして事件か!?!」

「え！　依頼なんですか!?!」

「わーい！　久しぶりの依頼だー!?!」

指さされた少年探偵団の内、元太、光彦、歩美は少年の元へ行き、キラキラとした目で見上げる。しかし、「え、え？」と今度は少年が困惑していた。

「違うの？　お兄ちゃん」

その様子に気づいたコナンが助け舟を出す。そうでなければ少年

はずつと3人に質問攻めにされていただろう。

「そ、そうなんだ。ごめんね、依頼じゃなくて」

「ちえー、なんだよ、期待させんなよな」

「ちよつと元太くん、ダメですよそんなこと言っちゃ」

「そうだよ元太くん。それに、事件なんてない方がいいんだから!」

「そうですよね! と光彦が同意するのを見て、コナンは溜め息をつく。

(その事件を期待してたのは誰だよ……。だが、そうじゃないなら何の用なんだ?)

「じゃあ私たちに何の用?」

コナンが疑問に思っていたことを灰原も思っていたのか、代わりに言った。少年は安堵の表情へ変わり、さらに笑顔となつてとんでもない事を言い放つ。

「あのね! 僕、君たち少年探偵団に入団したいんだ! よろしくお願ひします!」

突然の入団希望発言に、元太、光彦、歩美は顔を見合わせた。

「えー!」

(おいおい、マジかよ……)

「あら、賑やかになるわね」

コナンは見るからに幼そうな少年を見て、子守が面倒そうだと、また溜め息をついた。

人の少なくなった校舎の1年B組の教室。そこでは奇妙な光景が広がっていた。

「それでは、あなたの名前と学年、特技なんかを教えてください」

「はい! 帝丹小学校4年A組、神崎 直也、年齢10歳。特技は特にありませんが、自転車に乗るのが得意で、勘が鋭いのが自慢です!」

机を向かい合わせにし、まるで刑事ドラマの取り調べのようなことを、1年生が4年生にしている光景だ。

取り調べをしているのは元太、光彦、歩美で、それぞれ向かいの席

に座ったり、別の席に座ってメモをとったり、怪しい人物を見るように睨みつけながら周りをうろついたりしていた。

逆に取り調べられている側、直也は背筋をピンと伸ばし、向かい合う席の片方に座り、目をキラキラと輝かせながら質問に答えていた。因みにコナンと灰原は少し離れた場所から一人は面白そうに、もう一人は呆れたように眺めていた。

「勘、ですか？」

「はい！ 小さな頃から勘だけは鋭くて、いろいろな人を助けたり、これに助けられたりしました。僕の勘はなかなか外れません！ 外れて欲しくても外れません！」

(なんだそりや……。てか、素直すぎんだろ)

直也は実にハキハキと向かいの光彦に素直に対応する。どちらが年上か分からないとコナンは苦笑を浮かべた。

「え〜！ 勘が絶対当たるなんて、すっごーい！」

「なんでえ、そんなの信じられっか！」

直也の勘が鋭いという発言に歩美が食いつき、すぐに元太が噛み付いた。

自分の個性を否定された直也は少しムツと唇を尖らせたあと、今まで良くしていた姿勢をふんぞり返ったものにして、フンと鼻を鳴らした。

「じゃあ、試してみます？」

「まさか、ここまでするとは思わなかったよ」

「じゃあ着いたら耳をふさぐね」

「あ、はい」

現在直也はタオルで目を覆われ、さらに背後から歩美に耳を手で塞がれる約束をしていた。ここからさらに教室の外へ出て行き、離れたところで数分待機することになる。

何故こんなことになったのだろうか、直也は歩美と灰原と一緒に廊下を歩きながら、せめて目的地についてから目隠しして欲しかったなと愚痴りながら考えていた。

その頃、元太たちは直也の筆箱をどこに隠すかを相談していた。

「なあなあ、これどこに隠すんだ？」

「あー、ここなんてどうでしょう？それに、当てるチャンスを一回きりにするとか！」

「それいいな！　そうしよーぜ！」

決していいじめではない。直也の勘の信頼性を試すものである。

「おいオメーら、遊んでんじゃねえだろーな。だとしたら失礼だぞ」

「違いますよコナン君、僕らは真剣なんです！　ほら、コナン君も手伝ってくださいよ」

「ったく……しゃーねーな」

わざわざ勘の良さを試すなんておかしな話だとコナンは言うが、実は直也の勘の良さが気になっていた。

何度も物を隠しても隠しても、その在処全てを当てたのだ。しかもあちらも真剣なのか、一度も外れない。奇妙な話だ。先程の話しは本当だということなんだろうか。だとしたら少し恐ろしい話だなとコナンは軽く天井を見上げ、その後2人にアドバイスする。

「なあ元太、光彦。あそこなんてどうだ？」

2、少年、試験を受ける。

「もう戻っても大丈夫なんだね？ 分かった！ 直也お兄ちゃん、目隠し取るね」

「あ、はい」

光彦からの連絡を受けた歩美が直也の目隠しを取る。いきなり明るくなった視界に、直也はせっかく開けたまぶたを閉じなければならなかった。

「うわ、まぶしー」

「それじゃ、教室に戻りましょうか」

「あ、はい。あ、目が慣れるまで待ってくださいーい」

そんな直也の願いもむなしく、灰原は先へ行く。仕方なしに直也は眩しさから避けるように目を手で塞ぎ、歩美に手を引かれながら教室へ戻る。

「こんな、3階の端っこの教室までくるんだから、目隠ししなくてよかつたんじゃない？」

「そ、そうだったかもねく……エへへ」

教室に戻った直也は、すぐに教室の違和感に気がついた。眩しさに慣れ、教室を見回すその目は、鷹が獲物を探すかのように鋭い。

「あ、これが最後の試験です！ ですので、当てるチャンスは1回きりにします！」

「え!? そんな、1回きりなんて酷いよー」

「でもオメー、ここまで全部1回で当ててきたじゃんよ！ それともなんだあ？ ここに来て自信なくしちまったかあ？」

「なくしちやいましたか〜？」

「そんなことないよ！ 分かった。1回きりだね」

元太と光彦に煽られ、直也は気合を入れ直す。両手で頬を叩くと、また先程のように睨みをきかせ、天井を見上げた。

(……当たってるかなあ……?)

本当の事を言えば、直也は筆箱の隠し場所の検討が既についていた。しかし、自信がないのだ。できれば勘が外れていて欲しいし、探

したくもないのだが、自分の力を認めさせたい。信頼を勝ち取りたいと考えていた。

(やるしか、ないのかな……)

「おい光彦、元太、オメーら外出てろよ」

「はあ!? いきなり何言うんだよコナン!」

「そ、そうですよ! これは入団試験なんですよ? 僕らが審査しないで誰が審査するんですか!」

直也が探そうか探さまいかを迷っているそばでは、コナンが元太と光彦に教室の外に出るように促していた。

「怒んなくて。あのなあ、お前ら2人共、あいつが正解の場所を見るたび慌ててんぞ? 正直邪魔だぞ?」

確かに、彼らは直也がある一定の場所を見た途端に慌てたように声を漏らしたりしていた。これでは相手にここにありますよと教えているようなものだ。

しかしコナンにそれを指摘された二人は反省の色を浮かべながらも、その後自信有りげにニヤついた。

「だ、だってよく」

「コナン君が教えてくれたあの場所、絶対に見つからない気がするんですから。見つかりそうになったら、そりゃ慌てますって」

「おまえらなく……」

とりあえずコナンは二人を遠くにやる。その間も未だに直也は悩んでいた。

(本当に、勘だけで見つけれられるのか?)

今までののは勘で乗り切れたのだとしても、こいつは無理だろうなと、お手並み拝見とうすら笑いながら、コナンは直也を観察することにした。

静かな教室で、直也は悩んでいた。コナンを含めた教室に残っている3人にはそれが筆箱の在処を考えているように見えるようだが、それは違う。

直也は、探そうか探さまいかを悩んでいるのだ。筆箱の在処は既に検討がついている。しかし、その在処を搜索するのを彼は少々悩んでいるだけなのである。

「ねえコナン君。お兄ちゃんの筆箱ってどこにあるの？」

「え？ 今答え聞くのか？ そうすると歩美ちゃんも光彦たちと同じ場所に行かなくちゃならなくなるぞ？」

「えー！」

「ヒントくらいならいいんじゃないの？ 本当に分かりにくい場所にあるのなら、私たちでも分からないでしょうし」

「灰原、オメーなあ……」

直也が悩んでいるそばでそのような話をするコナン、歩美、灰原。直也は考えるのに必死なのか、こちらの話を聞いている素振りはない。見張っていたいという思いはあるものの、コナンは2人に少しばかりヒントを与える為に教室の外に出るように言った。

「いいか、あいつに聞こえたら台無しだからな。小さい声でしゃべるから、ちゃんと聞けよ？」

「うん！」

「はいはい、分かったから早くヒント頂戴」

「オメーなあ……。じゃあヒントだ。1つ目、そこは、普段から掃除されない場所だから、すごく汚れている。2つ目、そこは普段、意識されない場所だ」

「え、それだけ？」

教室の外に出たコナンは2人にヒントを出す。しかし、やはりいうべきか、歩美にはまだ分からないようだ。

「フツ……なるほどね」

「お？ 灰原は分かったのか？」

「ええ。まだ分からないけれど、検討は付いたわ」

「ふくん？」

「な、なによ」

灰原はコナンのヒントを聞いて隠し場所がわかったと笑うが、コナンはそんな灰原を見てニヤニヤと笑う。

「なによ、私の考えが外れてるとでも言いたい訳？」

「ま、当たってるかどうかは、あいつが教えてくれるだろうよ」

コナンは教室の中の直也に目をやる。すると直也はすでに動き出していた。

「よし、やるぞー！」

そう言うのと直也は教室の中央の席2列をそれぞれ左右に寄せ始めた。

「え、彼はいったい何をやっているの!？」

「ああ、正解を見つけちまったみたいだな」

「ど、どういうことコナン君？」

「あ、話し合い終わったの？ だったら机寄せるの手伝って欲しいな」

歩美と灰原が困惑しているのに気づいていないのか、直也はのんきに3人にそう頼んでいた。

3、試験結果と、合否。

「おい元太、光彦。そろそろ見つかりそうだから戻ってきてもいいぞ」
『な、なんだって!? そう簡単に見つかる訳ねえだろ!』

「いいから。早く戻ってきて、机寄せるの手伝えよ」

(……何で会話してるんだろう)

コナンが探偵団バツチで元太らを収集している様子を見ながら、直也は今度は大きな教卓を運ぼうと動いていた。

現在教室には机を寄せたことで中央に大きく道ができており、そこを利用して教卓を運ぼうとしているのだ。運ぶ先は、教室の後ろの窓側。

「よつと……重っ」

「あ、ちよつと待って直也さん、今元太たちが来るから」

「そうなの？ 元太君って、あの大柄な子だよな？ 助かるな」

「戻ったぜ」

「ただいま戻りました」

「あ、いいところに！ 早速だけど元太君、教卓運ぶの手伝ってくれる？」

「お、おう。任せろ！」

戻ってきた元太と共に直也は教卓を教室の後ろに運ぶ。時折引きずってしまい、嫌な音が鳴ったりもしたが、なんとか運ぶことに成功した。

「ふう、ありがとう元太君。助かったよ！」

「おう！ ……それで、筆箱の在処、もう分かっちゃったのか？ チャンスは1回だぞ!」

「うん、まだ自信はないけど、探さなきゃ探し物は見つからないわけだしね。勇気出してここ、探すよ！」

そう高らかに宣言しながら指差した先には、天井にある、小さな戸があつた。

ある者は不思議そうに首を傾げ、ある者は秘密ごとがバレたように

焦り出し、ある者はやつぱりなど脱力した。

「ちや、チャンスは1回だけなんだぜ!? そんなところより、もつと現実的なところを探したほうがいいんじゃないのか?」

「いいや! 僕の勘がここにあるって言ってるんだ! 僕の勘は外れて欲しくても外れないんだから!」

元太の言葉に逆に奮い立った直也は近くの席から椅子を持ち出し、それを教卓の上に乗せ、補強の為に光彦と元太に支えるように頼む。さらにその上に自身も上り、ようやく届いた天井裏に繋がる戸に手をかける。

「あー。筆箱、無事でありますように!」

それが掛け声だったのか、慎重に戸を開ける。天井裏は思ったとおり埃まみれで、直也は思わず咳き込んでしまった。

「直也お兄ちゃん、大丈夫?」

「あ、ゲホツ、ゴホツ! ……い、一応大丈夫だよ」

目の前に浮かぶ埃を手で払うと、直也は暗い天井裏を目を凝らして見る。するとすぐそばに、見慣れた形があるのが確認できた。その下にはご丁寧に新聞紙が敷かれている。

「あ! あつたよゲホツゴホツ!! おえつ、埃がうえつ! ゴホツ」

「ああ、暴れんなよ!」

「落ちちゃいますよ!」

「ご、ごめん、すぐ降りるから……」

直也は咳き込みながら目の前の己の筆箱を手に取り、椅子と教卓の上から降りた。

「ふう、まあ、これでミッション完了!」

「文句が付けられませんね、こりゃ」

「ホントに一発で見つけたんだらうな？」

「もちろん！」

直也は服についた埃を叩き落としながら、元太らに向かって笑みを作る。

「なるほどね。普段から掃除されない場所だから、すごく汚れている」、普段、意識されない場所”。そこに当てはまるのは、天井裏つて訳ね」

「え、どうして？」

「ほら、教室の天井裏なんて掃除なんてされないし、天井自体、私たちは普段意識しないで生活してる。私はてっきり掃除用具のロッカーに隠してあるものだと思っただけれど」

「な？ 意外だったろ？」

「ええ。でも、よく思いついたわね、天井裏なんて」

「いや、偶然目に付いたんだ。しかし、どんなに勘が良かったって、そこは無理だろうと踏んだんだがな」

そこで机を元に戻していた直也がコナンたちに振り返った。

「だから言ったでしょ？ 僕の勘は外れないって！」

それより、机元に戻すの手伝って、と直也は笑顔で頼んだ。

「あの、それで、試験の結果は……？」

緊張した面持ちで直也は光彦に詰め寄る。緊張しすぎなのか、胸を手で押さええている。

光彦も真剣な表情で、直也に結果を伝える為に口を開く。

「皆で話し合った結果、神崎 直也さん、あなたは……」

ゴクツと、直也の喉を鳴らす音がする。緊張感が静かな教室を満たしていく。

光彦の口が開く。

「あなたは、不合格です」

「ふござう、かく……」

光彦の発した言葉を反芻する直也。意味を理解したとき、彼はガクリと膝を折り、項垂れてしまった。なんでそんなに探偵団に入団したいんらうとコナンは不思議に思っていた。

「散々試験をした後に気づいたのですが、そもそも僕らは子供とはいえ探偵団。推理をしなければならぬのです。考えなければならぬのです！」

「……あああつ!!」

光彦の言いたいことが分かった直也は更に床に手をついて叫び声をあげる。光彦は続ける。

「あなたは確かに探し物をすべて当てました。しかし、そのときあなたは考えるのではなく、勘で当てました。そう、勘。そんな探偵なんていません!! いや、それは探偵でもありません！」

「……」

床についた手が握り拳を作る。

「ですから、申し訳ありませんが、入団は諦めてください」

「……仕方、ないです、ね……」

直也は力なく立ち上がる。その瞳は涙を浮かべ、自白する犯人のような、諦めた笑顔を浮かべている。

なんでこんなシリアスな空気になっているんだろうとコナンは一人冷めていた。

「……入団試験、お付き合いくださりありがとうございました。それじゃ……」

「ははは、直也お前、入団できてないじゃねえか！」

どんよりと沈んだ静かな教室に、場違いな笑い声が響いた。

4、生意気子供と大事件。

静かな教室に泰輝の笑い声が響いた。その隣で楓太も同じように笑っていた。

「え、ふ、2人とも来てたの!?! てか、見てたの!?!」

「ああ。いくら待っても教室に帰ってこないから、迎えに来たんだよ。そしたらなんか机寄せてるし、天井裏探してるし、入団断られてシヨック受けてるし……はははは」

「なんだか表情がコロコロ変わってて面白かったよ!」

「う〜……」

(今度は誰だ?)

泰輝と楓太は今、教室の出入り口近くで直也のことを笑っていた。しばらく直也もその2人と会話していたが、ぼかんとしている探偵団に気づいたのか、2人のことを紹介し始めた。

「もう、あんまり関わらないかもしれないけど、一応紹介するね。こっちの黒髪でつり目でいつもポケットに手をつっ込んでる方が泰輝」

「よろしくな」

「そして、こっちのふわふわ茶髪の、僕らの中では一番大きい身長の子が、楓太だよ」

「よろしくね!」

「う、うん……」

5人は、詳しく言うなら3人は、戸惑った様子で応えた。直也は批難するような視線を泰輝と楓太に向ける。

「いや、だから、もう関わらないかもって言ってるでしょ? 宜しくもなにもないよ」

「は? あ、あー。そーいやまだ言ってなかったな、楓太」

「そうだったね、忘れてたよー」

「へ?」

直也は目を丸くする。2人はそんな直也を見て笑い、少年探偵団の3人を見やる。

「あのね、君たち少年探偵団に、依頼があるんだ！」
「依頼っ!!」

依頼という言葉聞いた3人は目を輝かせた。そして次々とどんな依頼なのかと詰め寄り、やはり楓太を困らせていた。

「あ、ちや、ちやんと話すから落ち着いて、ね！」

「す、すまねえ……」

「気をつけます……」

「ゴメンなさい……」

「うん！ 反省したなら大丈夫だね！」

楓太は感心したように頷き、ようやく依頼の内容を話した。

「あのね、僕の家猫を探して欲しいの！」

楓太がふわりと笑顔でそう言えば、なぜか空気が硬くなった。

「……なんでえ、ただの猫探しかよ」

「え」

「僕たちはもつとこう、スリルのある事件とか、宝探しをしたいんですよ」

「え、探偵団ってそんな組織だったの」

「歩美、ただ猫ちゃん探すなんて、いい加減飽きたよ」

「なんだよこいつら、依頼人にケチつけてるぞ」

「おいこらお前ら、本気で失礼だろ」

楓太の依頼内容を聞いた元太たち三人は急に渋りだした。それをコナンが窘める。

「それに急に態度が変わりすぎだ。楓太さんなんて固まってるだろ」

「だってコナン君、僕らはもうすでに猫探しなんかよりもつとすごい事件を、いくつも解決してるんですよ？ そんな僕らがまた猫探しをするなんて、とてもじゃないですけど、嫌ですよ」

「そうだそうだ！ 俺たちにはもつとすごい事件がお似合いだぜ！」

「歩美も、もつと謎解きとかしたーい！」

つまり彼らは依頼内容に対して舐めた態度を取っているのだ。これには直也も参った。

「だからってお前らなー」

もつと言い方あんだろが、とコナンが窘める横で、楓太は泣きそうな顔で直也の肩に頭を乗せる。

「楓太……？」

「……ボクにとつては、大事件だよ」

鼻声でそう告げる楓太の様子に、コナンたちはもちろん、いままで愚痴をこぼしていた三人も口を閉じた。

楓太はそのままの格好で続ける。

「もう、ルールー、一週間は帰ってきてないんだ。ボク、帰ったあと、心当たりのある場所を探したりしてたけど、全然見つからなくて……。どこで何してるかも分かんないし、ちゃんと食べてるかどうかも分かんない。もし、もし何も食べてなくて、おなかを空かせてたら、どうしよう……。どうしよう……」

「楓太……」

鼻をすすする音がした。楓太の手はズボンを握りすぎて白くなっている。

その様子を見た泰輝と直也は大袈裟にため息をつく。オデコを置いていた肩が急に動いたことに驚いた楓太は顔を上げるが、振り向いた直也に頭を撫でられた。

「え、直也……？」

「もう！　なんで僕たちのことを頼らないのさ！」

「そうだぞ楓太。こっちには強いどころか最強の味方がいるんだぞ？」

「うわ、自分で最強とか言ってるよ泰輝。痛いなく」

「お前のことだよ直也」

「僕かよ」

他に誰がいるんだよ。いや、最強じゃないからと言いかう二人を見てしばらくポカーンとしていた楓太だったが、急に我に返り、二人に尋ねる。

「え、いいの!? いつも二人とも、忙しそうにしてるのに……」

「えー、そんなの気にしなくてもいいのに! 僕らは何なの? はい
泰輝!」

「しんゆうです」

「正解!! だから楓太、悩み事はいつだって僕らに相談してよね!」

「直也、泰輝……ありがとう」

楓太は涙を拭って、またふんわりと笑った。

「じゃあこんな生意気な奴らは置いていって、俺たちだけで探しに行くか」と泰輝が言い、教室から出ていこうとした、その時だった。

「あ、あの! 僕も一緒に行つていいですか?」

急にコナンが猫探しに名乗りをあげたのだ。

「え、コナン君? 急にどうして?」

「その、人手は多い方がいいかな……って」

楓太はどうしたらいいのかと迷いながら二人を見る。直也はニコツと笑い、泰輝は「勝手にすればいいんじゃないね」と言いながらそっぽを向いた。

「……コナン君、だっけ? よろしくね!」

「うん!」

「じゃあ私も参加しようかしら」

「えっと、君は、灰原 哀ちゃんだったよね」

「ええ」

「そっか。よろしくね灰原ちゃん」

楓太とコナンと灰原が挨拶を済ませた後ろで、元太、光彦、歩美の三人は気まずい雰囲気になっていた。助け舟を出してやるかと、泰輝は三人の方に向き直る。

「で、お前らはどうすんだ?」

5、最強の味方はパンダなのか、狸なのか。

米花町のとある住宅街で、子供たちの声が響き渡っていた。

「おーい、ルーラー！」

「お願いだから出てきてー！」

「ほら、煮干しもありますよー」

「鯉節もあるよー！」

声の正体は、依頼人の猫を探す少年探偵団の元太、光彦、歩美の三人、そして依頼人本人の楓太だ。

三人は懸命に声を張り、猫を探すが、なかなか見つからない。それもそうだ。声を掛けてすぐに見つかるものなら楓太だって依頼しない。

楓太はそれでも探してくれる三人を見て微笑み、隣にいる泰輝の方を見遣る。

「ありがとね、泰輝。泰輝のおかげでこの子達もやる気出たみたいだし」

「たかがヤイバーカードのゴールデンなんかで釣れるなんてなー」

泰輝はカラリと笑う。

教室で三人が猫探しに協力すると言ったとき、それでもその時の彼らは渋々、といった様子だった。気まずい空気の中で無理やり言わされたようなものなのだから、当たり前前の感情と言えるだろう。

そんな三人の様子に気づいた泰輝が、もし猫を探し出したなら、追加で報酬を出すと言ったのだ。条件付きではあったが。その報酬の内容とは、泰輝が個人的に収集していた、ヤイバーカードのレアカードだ。

報酬の中身を聞いた少年探偵団の三人は急に目を輝かせ、元気よく協力すると宣言したのだった。

そして現在、彼ら三人はこうやって声を張り上げて猫を探している。

「みんなが仮面ヤイバーのこと好きでよかったね。でも、よくそれを報酬にしようと思ったね。泰輝結構好きだったでしょ?」

「……そろそろ卒業しようと思ってたんだよ。いつまでもガキっぽいもの見てるって思われたくねえし」

「僕らの中では一番遅かったね」

「うるせえ!」

泰輝と楓太は三人の後ろについて歩きながらただ駄弁っていた。本気で探しているのかとも思われても仕方ない光景であったが、2人の心境は非常に穏やかで、落ち着いたものだった。

「でも、まあ、見つかるだろうな。ルールー」

「うん。見つかるね、きつと」

「なんせ、最強の味方が、直也が探してんだ。見つからねえわけがない」

彼らとは別行動ではあったが、直也もまた、楓太の猫を探している。

「正直、あいつにだけ頼めば話は早かった気がするけどな」

「いいじゃん、ついででさ」

今度は楓太がカラリと笑う。

「それにしてもさ、ホント泰輝って交渉上手だよな」

「ん? あー、そうか?」

「そうだよ」

「そうか」

泰輝はとりたてて何ということもなく空を見上げる。薄い空だ。

「だってさ、こっちが協力してもらってるのに、条件なんて普通付けないよ」

「なんだよ。ゴールデンだぞ、ゴールデン。それなりに働いてもらわなくちやならんだろ。ただのやる気の起爆剤じゃないんだからよ」

「あはは、やっぱり好きなんだ」

「悪いか!」

「ううん」

楓太は笑うと、泰輝と同じように空を見上げる。なんか薄いね、と言葉を漏らした。

「ま、早いもん勝ちだと、またやる気が出てくるだろ。あいつらが先に見つけて、ゴールデンをゲットするか。直也が先に見つけて、少年探偵団に入団するか」

「ちよつと楽しみかもね」

二人は声を潜めて笑った。

コナンは疑問に思っていた。

「直也さん、どうしてあの二人と一緒に探さないの？」

一つは、直也が個人で捜索していること。

「んー？ 手分けしたほうがいいと思って」

「そっか。……んで」

「何かしら」

「なんでオメー、あいつらと一緒にじゃなかったんだよ灰原」

もう一つは自分と直也の他に、灰原が同行していることだ。

「別にいいでしょ。あっちには5人もいるんだし。それに、あなたにも興味があるから」

灰原は直也を見上げ、薄く笑みを浮かべながら言う。

「え、そうなの？ ちよつと嬉しいかも！ ね、どこに興味持ってくれたの？」

「そうね、あなたの勘の良さにかしら」

「やった！」

何がそんなに嬉しいのだろうか。

コナンの疑問は尽きない。

「ねえ直也さん、直也さんって、どうしてあんなに勘がいいの？」

「え？ ……それは、入団してからの秘密だ」

「勘がいいことに理由なんて必要なの？」

「まったく必要ありません」

珍しくキメたと思えば灰原に糾弾されへこむ直也。勘がいいことに特に理由は無いらしい。

「そうだ、そういうコナン君たちも、なんで僕についてきたの？ 僕一人でも大丈夫だよ？」

「え、いや、……人手は多い方がいいし、ね？」

「そっか。でもなあ、うーん……僕、いきなり皆からするとわけが分からない行動とかするし、付いてくるの大変だと思うよ？」

「大丈夫よ。江戸川君もかなりそういうことする人だから」

「おい、灰原……」

「尚更相性悪いよ……。ほんとに大丈夫？ 僕、勘に頼って行動している時、人の言葉とかほとんど入ってこないし、大変だよ？」

「だから、大丈夫ってば！ ほら、ルーラーだっけ？ 探そうよ！」

「そ、そうだね！ 先に見つけて、少年探偵団に入団するんだー！」

そのまま拳を天に突き上げて「おー！」と直也は声をあげた。

直也のことを観察して、コナンは幾つかのことに気が付いた。

まず、直也はよく喋る。入団試験の時は集中していたのかあまり喋らなかつた為、おしゃべりという印象は薄かつたが、普段はよく口が動くようだ。なかなか会話が途切れない。

次に、彼は感情の起伏が激しい。これは入団試験の時に気づいた。表情も豊かだ。

三つ目に、彼は楽しいことが好きらしい。コレは彼の友人の泰輝から何気なく聞いた。入団希望の理由も、それから来ているらしい。

四つ目に、コレは顔の話だが、彼は言われてみれば可愛らしい顔の割に、意外とつり目だ。言動や行動、仕草を見ると、その目をしているのは意外で、気づいたときは軽く驚いた。黒いまつげで縁取るそれは、意思の強さを感じさせた。

(パンダみてえな奴だな)

パンダのようにのんびりしているわけでもなければ大人しいわけ

でもないが、コナンはそう思った。

可愛らしい、愛くるしい見た目、仕草からは想像できないが、パンダも実はつり目だ。

そのくらいしか共通点はないが、コナンは確かにそう思い、失笑してしまった。

「何？ コナン君。え、もしかして僕を見て笑ったー？」

「あ、ゴメンなさい。なんか直也さんって、パンダみたいだなって思ってた」

「パンダ？」

「ああ、可愛らしい顔の割に、つり目な事？」

「え、つり目なのは分かるけど、僕可愛いのか？」

コナンが灰原の言葉に頷き同意する横で、直也は困惑の表情を浮かべる。それから小声で「カツコイイって言われたのにな……」とつぶやいたのが聞こえ、またコナンと灰原が軽く失笑する。

「ていうか、僕パンダみたいって言われた事初めてだよ。僕あんな葉っぱばかり食べないし……って待って。パンダってつり目なの!？」

「うん。目の周りの模様でたれ目っぽいけど、意外とつり目なんだよ」
「そ、そうなんだ……」

パンダ苦手になりそうだなあと直也は零した。

軽くへこんでいる直也に灰原が問う。

「じゃあ、あなたって普段はどんな動物に例えられてるの？」

「へ？ えーつと確か、狐とか、狸って言われるかな」

「へえ、意外ね」

どんなところがそう見えるのだろうか。狸なら確かに、目も髪の色も焦げ茶色であるから頷けるのだがとコナンは内心考えていた。

「うん。僕もそう思って理由聞いてみたら、狐も狸も化けるからってさ」

「化ける？」

「うん」

直也は前を向く。そのまま遠くに視線を送り、だらりと腕を垂らし

た。

「僕もよく、集中すると、化ける、から……って」

ゆっくりと言葉を口にした後、直也は住宅街の道の真ん中で立ち止まる。

「どうしたの、直也さん。急に立ち止まって」

「もしかして、猫の居場所が分かったの？」

直也は二人の問いには答えず、そのままの体制で首だけを右に回し、一軒の家を見る。

コナンからは家を見る直也の顔が、感情が読み取れないほど真顔なのが見えた。それだけしか見えなかった。

灰原は異常だと感じた。首だけを回した姿を。体はまったく動かない姿を、異常だと感じた。

6、勘が働けば、他は見えなくなるらしい。

直也が見ているのは、一軒の二階建ての民家だ。大きさはそれほどでもないが、外観は綺麗で周りの民家と比べてもそう目立つものでもない。返って個性がなく、埋もれているようにも思える。

しかし直也は、その無個性の家に強く惹きつかれている。コナンと灰原の声が全く届かないほどには。

ようやく体を右にひねり、直也はそのまま、その民家の敷地内へと足を運ぶ。

その様子に驚いたのは、コナンと灰原だ。

「ちよ、ちよつとあなた！ どうするつもり!?」

「直也さん、いきなりどうしたの!?!」

中に人が居るかも知れない。そうでなくとも勝手に人の敷地内に入るという行為は褒められたことではない。

元太たちのようにまだ幼いならば、拍子に、ということでも許されるかもしれないが、直也はそういうことも分別がつく年齢だ。

しかしコナンたちが呼び止めるのも聞かず、直也は歩を進める。

「だから、待ってってば!!」

動揺しているのか、らしくもなくコナンは直也の右腕を引き、無理やり止めた。

「!!? ……」

物理的に呼び止められた直也は大きく驚きながらも声は出さず、首を回して腕を引いているコナンを見遣る。そして一つ、溜め息をつく。

「うーん、いきなり変なことしちゃってごめんね? 驚いちゃった?」

「あ、当たり前でしょっ! あなたいきなり……………」

「ホントだよ。でも、もしかしてここにルールーがいるの?」

元の明るい直也に戻った様子に、今度はコナンたちが安堵の溜め息を吐いた。

しかし、それはつかの間の休息だと思い知ることになる。

直也はおもむろに腕にあるコナンの手を解く。コナンも必要性をすでに感じていなかったため、それに応じる。自由の身になった直也は2人の方へ向き直り、その小さな頭を撫でる。

「そう。コナン君が言った通り、僕の勘がそう言ってるんだ。ここにいるのは間違いないよ。でもね、それと同時に、君たちを連れて入ってはいけないとも言っているんだ。ね、ここで待っててくれる?」

「え……で、でも、3人で探す方が……」

「ね、コナン君。分かってくれないかい?」

頭の上に乗っている手に力が入るのを二人は感じた。

「君たちがいると集中の邪魔なんだ。ここで待っててくれる?」

言葉は優しく、尋ねているようにも聞こえるが、その実、拒否権などコナンたちには与えておらず、むしろ脅しているようにも2人に感じさせた。

焦げ茶の目は、寒々しかった。

「う、うん……」

「分かった、わ……ここで待ってる」

「いい子だね」

そこでようやく直也は微笑む。しかし二人は再び安堵を感じることはなかった。

「じゃあ、ルールーを探してくるね! あ、ランドセルもお願い!」

「ええ……」

「頑張ってるね……」

故に、二人は手を振り返し、見送ることしかできなかった。

民家の敷地内へ入り、消えていった直也のことを思い、二人は語っていた。

「灰原。あいつのことをどう思う?」

「神崎さんのこと？ ……そうね、何とも言えないわ」

「だよなあ……」

彼は変な人間だ、とコナンは感じた。

感情が豊かで、暖かい人間だと思えば、ひどく感情がないときもある。しかしこれ以外にも別の面が直也にあるように思えてならない。

「あいつはいつたい、何者なんだ……」

コナンは直也が入っていった民家を見上げながら、未だ答えの出ない問題に頭を悩ませていた。

7、探索者に降りかかる災難。

コナンたちを置いて民家の敷地内に入った直也は、まずインターホンを鳴らしたが、誰も出てこなかったため、庭などの家の周りを見ていた。

空の駐車場から左の方を見ると庭があり、そこには物干し竿などが取り付けられている。外の道側には幾つか木が植えられており、その木は手入れが行き届いているのが伺える。

その庭に出入り出来るようにか、大きな窓と縁側がある。脱ぎかけのサンダルがあり、この家の人間が使用している形跡があるが、残念ながら窓には厚手のカーテンがかかっており、中の様子を伺うことは出来ない。

まあ外出中なら閉めるよなと一人思い、今度は裏へ周ろうと庭の更に先に行く。

庭と反対へ回る道はとても狭く、体を横にしてカニのように歩かなければ通れなかった。しかしそれでも服や肌が塀や壁で擦れていく。

ここはあまり掃除されていないのか、落ち葉や風で飛ばされてきたであろうゴミが落ちていた。大人では通れないほどの狭さなのだから、仕方ない。

「痛えな……」

体に付いたすり傷や汚れを見て、軽くため息を吐く。それから汚れを取るために服を叩く。

狭い通路を抜けた先にあるのは、通路ほどでは無いにしろ、これまた狭い通路だ。見たところ窓はあるが、換気や明かりのための窓で、大人が出入りできるほどの大きさの窓、……ではあるが、なにもここから入ろうとは思わないだろう。

換気用の窓といえ、先程の狭い通路にも、一階の天井部分に当たるであろう場所に小さく窓があったなど、直也は通路を覗く。

まあそれはいいと、窓を確認した直也は探索を続ける。

裏庭には数本木が生えていた。これも外から中の様子が見えないようにするためだろう。

「ルールー、どこだーい？ 出ておいでー！」

直也は一度呼びかける。それで出てくるとは思っていないが、確かにここにいると勘が告げているのだから、いることは間違いない。

せめて鳴き返してくれないもんかと期待してまた呼ぶが、何度呼んでもルールーはついに鳴き返してはくれなかった。

「とすると、ルールーは家の中か……？」

ここは颯太の家ではないのだから、それはおかしい気がするのだがと直也は首を傾げる。

親切な人が拾ってくれたのだろうかと思うことにして、搜索を続けようと直也は近くの窓の中を覗き見た。

直也は目を疑った。

直也が窓から覗いた部屋には大きな本棚があり、木の色を基調とした落ち着いた雰囲気作りから、書斎であると伺えた。

そのような落ち着いた雰囲気な作りの部屋だからこそ、そこに転がる惨状に、目がどうしても釘付けになってしまう。

「あ……、う……」

直也はそれがなにか理解できたと同時に、絶句した。それから覗いていた窓に両手をつき、必死に中のその様子を確かめようと身をよじっていた。

書斎と思われる部屋の中で転がっていたのは、この家の主人と思われる男性だった。

ゆったりとした格好をしているその男性は、こちら側に向かつて、うつ伏せの状態で倒れている。しかし頭部は、今直也が覗いている窓の下にあるサイドテーブルやら本やらで隠れて確認することができない。

「大丈夫ですかー!!? おーい!! 大丈夫ですかー!!?」

直也は窓を叩きながら大声でそう呼びかける。しかし男性はまったく反応しない。直也はさらに声をかけ、窓をバンバンと叩くが、それでも結果は変わらなかった。

「まさか、熱中症……?」

確か部屋の中でもなるんだよなど、テレビでやっていた程度の知識をひねり出した。

この日は比較的過ごしやすい気候で、熱中症になるような暑さではないのだが。

何がどうあれ、緊急事態には変わりなく、直也は表の玄関に回る。

「あ、直也さん! 何かあったの? さっき大声出してたけど」

「ゴナン君! 大変なんだ、家の中で男の人が倒れてる! 暑さで倒れちゃったかもしれないから助けるの手伝って! 哀ちゃんも!」

「なっ!? わかったよ!」

「わかったわ!」

この家の駐車場で合流した三人は玄関へ急ぐ。

なぜ真っ先に玄関へと向かったのかと問われれば、それはただ単に家への入り口だったからで、鍵が開いている等という都合は考えていなかったからである。

直也は再びインターホンをならし、大声で呼び掛ける。

先ほどから散々大声をあげていたため、他の家の住民たちが何事かとわらわら集まってくる。

そんなことを気にせず、直也たちはドアを叩く。この家に他の住民がいれば、この騒ぎで気づいてくれるだろうと期待していたのだが、反応はない。しびれを切らした直也がドアの取っ手に手をかけた。

「つえ？」

するとどういふことだろうか。ドアはいとも簡単に空いてしまったではないか。つまり最初から鍵は掛かっていなかったのだ。

なんてことだ、訪れた時点で早急に助けられたかもしれないのか！ 舌打ちをしながら、直也は勢いよく扉を開け、中に飛び込んでいった。

「おーい！ 大丈夫ですかー!!」

書齋であるだろう部屋の前にたどり着いた直也は再びドアを強く叩き、今度は戸惑い無くドアノブに手をかけた。

「大丈夫ですか！ ……つう!？」

勢いよく書齋の中へ踏みいった直也は、その書齋の光景に、書齋に充滿していた匂いによって、ゆっくりとした足取りで、後ろに下がらなければならなかった。

どうして。

様々な疑問が頭の中で駆け巡る。そんな中、直也がやっと口の中で発した言葉はそれだった。それすらも誰の耳にも届かないばかりか、さらに直也の頭を混乱させる結果を招くだけだった。

「直也、さん……?」

「来んな、コナン君。見ちゃいけない」

いきなり顔を青くした直也を心配したコナンが声をかけながら近

づくが、それを直也に静止された。そこでコナンは気づいた。いつの間にか嗅ぎなれていた、鉄のような匂いに。

8、警察沙汰から年下を守りたかった。

何故あの時気付かなかったのだろう。落ち着いていたならばその赤いものに——今では乾いて黒く変色しているが——気付いていただろうに。

直也は悩んでいた。いや、あまり深く考えないように、壊れないように、的外れなような、そうでないようなことを考えていた。

あまり深く息を吸わないようにと、ひどく震える手で鼻と口を押さえる。それで自身が怯えていることに気づき、さらに後ろに数歩下がった直也はそこで膝をついてしまった。

「直也さんー！」

「来んなつつつてんだろ!! ……コナン君、警察呼んで。後、家には誰もいれないようにして。これ以上部屋が荒れたら困るから」

「う、うん……」

コナンがこの家から出ていったことを確認したあと、直也は震える体に鞭打ち、先ほど勢いよく開けたドアを閉めようと手を伸ばす。半分まで閉めたところで、直也は再び中の様子を確認する。

「こんなの、小さい子には見せられない……」

先ほど熱中症と思っていた男性は、こちらに足を向けて、頭をかち割られて息絶えていた。周りには血が飛び散り、頭部付近には血だまりが出来ていた。

「うっ……!!」

そこまで視覚で確認したあと、それから発せられる強烈な匂いに当てられて、吐き気をもよおした直也は家の外に逃げ出した。

「撲殺されたのはこの家の主人、笠原 源五郎さん73歳。死亡推定時刻は本日午後2時から4時の間。凶器は鈍器のようであるということの確認できましたが……」

「その凶器が未だ見つからない、と……」

夕方5時半。笠原 源五郎氏が殺害された家、つまりは現場の一通りの検証を終えた警察、警視庁の高木刑事と目暮警部は事の確認を行っていた。

「見た限り、犯人は被害者に強い恨みを持っていたようだな。額に一回、後頭部に二回打撃を加えたようだ」

「ええ。リビングに血痕が飛んでいたことから、犯人はまず、被害者をそこで一度正面から凶器で殴打し、その後この部屋へ逃げようとした被害者を追って背後から後頭部を殴打。そして倒れた被害者に止めの一撃……」

「なんて卑劣な……」

高木の意見を聞いた目暮は現場の状態を一瞥したあと、顔をしかめて言った。

現場には未だ鑑識が捜査しているため、死体があるままの位置で転がってる。目に優しいくない光景だ。

それから目を外し、背後に向ける。目暮の向ける視線の先には、大きく肩を動かし、体を精一杯抱きしめ俯く、直也の姿があった。

「彼が、事件の第一発見者かね」

「はい。コナン君の話によりますと、猫探しの際、たまたま訪れたこの家で遺体を発見したそうです」

「猫探し？」

「はい。どうやら少年探偵団の子達が猫探しをしていたそうで、その

依頼者の友人だそうです。一緒に探していたそうです」
「なるほど」

高木は目暮に報告し終わると、被害者宅のソファアームに腰掛け、顔を青くする直也に近寄る。

「君が、笠原さんの遺体を最初に発見した、神崎 直也くんだね？ 発見した時の話を詳しく教えて欲しいんだけど……気分悪いかい？」
「……大丈夫、です」

高木の問いに、か細い声で返す直也。口ではそう言っているものの、伏し目がちになった目から気分がすぐれないことがありありと伺えた。それでも捜査はしなくてはならない。高木は言葉を続けた。

「そうかい？ なら質問するけど……。どうして君は今日、この家に来たんだい？ 知り合いの家というわけでも無いようだけど」
「……しょ、少年探偵団のみんなと、友達の猫を探してて、それで、この家にその猫がいる気がして、入ったんだ。さ、最初はちゃんと許可取ろうとしたんだよ？ でも、インターホンを鳴らしても出てこなかったから、外から見て回ったんだ……。それで、あそこの窓から覗いたら、おじいさんが倒れてて……」
「うん」

「ね、ねえ、不法侵入とかで、僕、捕まったりしない？ ご、ごめんなさい、ごめんなさい……」
「大丈夫だよ。それで君は笠原さんを発見してくれたんだから。誰も君を咎めたりしないし、もちろん逮捕だってしないさ。見つけてくれてありがとう」

高木は極力優しい声色でそう答える。それが功を奏したのか、直也は肩の力を抜いた。

「そうなの？ 良かった……」

「ああ。……質問を続けていいかい？」

「うん」

直也は顔色をまだ青くしながらも、答える意志を示した。

「……君は、本当に笠原さんと関係がないんだよね？」

「……ないよ。疑ってるの？」

直也は薄く高木を睨みつける。高木は首を振る。

「いや、小学生の君に限ってありえないとは思っけどね。一応確認と思っ」

「そっか。まあ、僕が発見した時にはもう薄い血は黒く固まっていたから、殺されてから数時間は経ってたと思うよ。きっと殺された時間には僕は学校にいただろうから、アリバイもある。犯行ができたのは大人だと思うよ？ あの死に方からしても子供じゃ無理だろうし……。うおえっ」

「だ、大丈夫かい？」

「……ごめんなさい、思い出したら、気分が悪くなって……」

「いいよ、無理はしないで」

直也はまた両手を顔の方へ持っていき、口を塞ぐ。顔をしかめ、蹲ってしまった。自分のすぐ近くに死体が有るのだと思うと、気持ち悪くて仕方が無かったのだ。

先ほど吐いて空っぽになったはずの胃から、また何かがせり上がってくる。直也はそれをコクンと、押し戻した。

9、頼りにならない警察と己。

「それじゃあ君は、今日たまたま笠原さんの家に立ち寄り、あその窓から笠原さんが倒れているのを発見。不審に思った君は玄関から入り、笠原さんが死んでいるのを確認した。……ということだね？」
「うん」

「そうか。でも本当にありがとう直也くん。君が見つけてくれなかったら、笠原さんは死んだことに気づかれなかったかもしれないからさ」

「え、なんで？」

「ああ、笠原さんの奥さんは数年前にお亡くなりになっていてね。2人の子供も、今は家庭を持っているからなかなか帰ってこないようだし。今は2人とも出張でここからかなり離れた場所に居るみたいだけだね」

「近所付き合いとかないの？」

「それはそこそこあったらしいから、もしかしたら数日すれば、可能性はあったかもしれない。ただこのあたりの皆さんは朝から夕方まで仕事に行っている人が多いらしくてね。目撃証言は期待できないんだよね」

「そうなんだ……。ていうか刑事さん、よく大事なことベラベラ喋るね？」

「え？ あ、あはははは……」

直也が指摘すると、高木は困った様な、焦ったような乾いた笑いをして、

「いくら僕が第一発見者だとしても、一般人なのにさ……」

「はは、耳が痛いよ。いや、コナン君がいるからつい、ね」

「……は？ コナン君がいるから？」

「ああ。コナン君って探偵の毛利さんというからか、よく現場にいるんだよ。小さいことにもよく気づいてくれるし、実は僕たちコナン君

を頼りにしている部分があるんだよね」

立ち上がった高木は気まずそうに直也から目をそらし、頭をかく。そんな高木を直也は軽く失望したように仰ぎ見る。それから視線を目の前のテーブルへとずらした。

「その分警察は頼りにならないと……」

「ん？ 何か言ったかい？」

「言つてない」

ボソリといった言葉がやはり聞こえなかった高木は直也になんだったのかを訊ねるが、直也はきっぱりとそれを否定した。

強く否定された高木は「そうかい」と一言言つて、仕方ないといった様子で直也を見下ろす。

コナン君といえば、と直也は青い顔をあげて家を見渡す。一緒にいたいと言つてコナンもこの家の中にいるはずなのだが、先程からコナンの姿が見えない。重い腰を上げ、もしや、と先程の高木の話を出しながら笠原が死んだ現場を恐る恐ると覗く。

「っ!!?」

コナンはそこにいた。

コナンは長年経験を積み重ねてきた探偵のように、静かに、注意深く笠原の遺体を見ていた。時折、何か考えているかののように口元に手を持つていく姿は様になっており、直也はひとり固まった。

血濡れの遺体と小学1年生。ありえない組み合わせで、ミスマッチで。なのにどこか日常のような。奇妙で奇妙で仕方がない。

「コナン君ー」

直也は震えを抑えた声でコナンを呼ぶ。その声にコナンはビクリ

と肩を震わせ身構えた。

「な、なに？ 直也さん？」

「なに？ じゃないよ！ なんで死体の近くにいるのさ！ 離れて！

というか行くよ!!」

「え、ちよつ！」

直也はコナンの腕を引っ張り、部屋の中から出る。しかしその時、直也は再び笠原の遺体を見てしまったばかりか、思い切り血の匂いを嗅いでしまった。

故に直也は部屋から出たところで膝から崩れ落ちてしまった。

「直也さん!?!」

「大丈夫かい？」

いきなり膝をついた直也を心配するコナンと高木。直也はそれがありがたく思いながらも、垂れた前髪の中からコナンに畏怖の目を向けていた。

(刑事さんはいいとして……コナン君はいつたい、何なんだ……?)

直也はそこまで考えてやめた。考えてはいけないと、ありのままを受け入れたほうがいいと勘が告げていた。

直也はため息しながら顔を上げる。

「帰りたい……」

気づけば時計の針は既に6時半を過ぎたあたりを指していた。少なく見積もっても2時間は心労と戦っていたのだ。疲れても仕方ない。

時計を見たついでに家の中を見渡す。綺麗にされていることと、や

たらと本棚が多いという印象を持たせる家だ。リビングの大きな窓の近くにはゴルフのパターマットが置かれている。きつと趣味だったのだろう。

それからもう一度時計を見たとき、直也は違和感を感じ取った。

「直也さん……？」

「高木さん、目暮警部、連れてきましたよ」

コナンはあの時の、この家に入る前の直也になった彼に声をかける。その声に続くように、千葉の声が聞こえた。その後ろから、ふたりの老いた男性が現れた。

直也はそのふたりを見て、口の中だけで言った。

「あ、犯人だ」

10、彼の勘は閃きではない。

この家はおかしい。直也はそう直感した。

しかし、何に違和感を覚えているのかが直也にはまだ分からなかった。ただ漠然と、どこかがおかしいのだと、勘が告げている。

直也が考えている横では、調べ終わった笠原の遺体が運ばれるための準備が行われていたり、先ほど千葉が連れてきた二人の男性が質問されていたりする。

横から盗み聞きした話しでは、二人いるうちのやせ型の方が嶺井ミネイ兼明カネアキ、少々恰幅が良いほうが斎藤サイトウ哲次テツジという名前ということが知れた。彼らは亡くなった笠原の古くからの友人らしく、よくゴルフにも行っていたらしい。なるほど、やはりあのパターマットは趣味のものだったらしい。

直也はパターマットのそばにあるゴルフバックに近寄る。

「なら凶器はクラブか」

直也はまた口の中だけで言う。その声を聞く者は誰ひとりいない。

コナンは何か手がかりがないかと、家の中を見て回った。結果、不自然な点が幾つか見つかった。

一つ、この家のどこにも、鍵をこじ開けたような形跡がないこと。犯人が笠原と関わりのない人物、例えば空き巣だとすると、かなり不自然だ。あらかじめ合鍵を作っていたとしても、出るときに鍵を開けたままにするわけがない。

一つ、やけに綺麗なこと。上と同じように、犯人が空き巣とすると家の中が綺麗なのはおかしい。警察も何か無くなっていないか確認しているが、金も判子も盗まれている形跡は無いらしい。

「ん？」

コナンはキッチンで気になるものを発見した。カップだ。

「洗われてそのままみたいだな……」

水切り場にはすっかり乾いたカップが、2つ、置かれていた。

キッチン近くのテーブルに行けば、そこにはまだ中身が残っている

コーヒーマーカーがあった。ドリップ式のそれは作られてから時間が経ち、すっかり冷めている。

もしや、これは客にもてなされたものなのだろうか。カップが2つということは、客は1人。笠原とその客用だったのだろうか。

そのカップが洗われている。これはその客が洗ったのか？ 何のために？ ……証拠隠滅のためにか？

家の中を見て回る中で、コナンはこの事件の犯人は笠原と関係を持つ人物だと考えていた。顔見知りであれば家に簡単に招かれるだろう。家の中が綺麗なのも納得がいく。

なら、うすら怖いものがある。

笠原を鈍器で殴り殺したあと、凶器が隠せる余裕が、落ち着いてカップを洗う余裕が、犯人にはあったということだろうか。

……なんてことはない。いつものことじゃないか、とコナンは内心笑うと同時に、自分の周りにはこんな人間ばかりだったのかと少し背筋が寒くなった。

「事件に慣れてない直也さんに、充てられたか…?」

「刑事さん、笠原は、本当に…?」

「ええ、お気の毒ですが、笠原 源五郎さんは何者かの手によって殺害されてしまいました」

高木は斎藤に笠原が殺されたということを再度伝え、それから笠原がどのように殺されてしまったを伝えた。

高木が手帳を取り出す。

「それでなんですが、嶺井さん、斎藤さん。笠原さんに恨みを持つような人、心当たりはありますか？」

斎藤は焦った。高木に「笠原に殺意のある人物に心当たりは無いか」と問われたからだ。

訊かれたとたん、斎藤はすぐ横に居る、いつもとはかなり様子の違

う友人——嶺井だ——を横目に見た。

斎藤はいつの頃からか、笠原と嶺井は似た者同士だと認識していた。お互い幼い頃から頑固で意地っ張りだったのだ。それ故、2人はぶつかり合うことが多かった。斎藤はそんな2人の間を取り持っていたのだが。

それなのに何故、こんな老いぼれになるまで3人でやっていったのか。それは単に、馬があつたからである。

斎藤ら3人はそれこそぶつかり合うことは多くとも、それ以上に気が合つた。

例えば、3人とも野球が好きだ。ボールを追いかけたり、それを味方のグローブへと綺麗に投げ込められたとき、何よりボールをバットでかつ飛ばせたときの爽快感が3人とも好きだった。得意なポジションはそれぞれ違ったために上手くいつていたのだが、そこは笠原と嶺井だ。こだわりも強い二人はお互いの悪いところをキツイ言葉で言い合つた。当時の斎藤としてはかなり頭を悩ませた事柄ではあつたが、今思えばあれは単にお互いを高めあい、更なる絆を深めた結果しか残っていない。

他にも、実は3人とも猫が好きだったりする。これは実に恥ずかしいことではあるが、一度だけ本気で激論を交わしたことがあるのだ。

「猫の何がいいか」という話題で話した時であつた。笠原は「猫は耳がピンツと立っていて、たまにピコピコさせるのが可愛らしい」と熱く語つた。対して嶺井は、「あの美しい毛並みと自在に動く感情豊かな尻尾が魅力的なのだ」と反発した。その時は斎藤も「喉を優しく撫でた時の「ゴロゴロ」と鳴らす、あの懐いている時が一番歓喜するときなんだ」と議論に参加してしまつた。それだけならばいつもと何ら変わらないが、3人ともその時三十路。議論していた場所も居酒屋と悪かつた。

気づいたときにはそこにいたお客が皆、こちらを興味深そうに見ていた。たまらず店を出ようと会計をしたとき、店員に「私は自分の膝に乗って眠つてくれた時が一番好きです」と言われ、非常に恥ずかし

い思いをしたのだった。

それでも場所を変えて議論を続けようと言いだした笠原と嶺井に齋藤は大いに呆れたが、仲がいいだけかと思ひ、自分も喜んで参加したのであった。

しかし、本当に、いつの頃からだろうか。

笠原と嶺井の二人はぶつかり合うことだけが多くなっていた。

例えばゴルフ。

2人は齋藤より早く、同時期に始めたからなのか、あの頃の野球の様にお互いの悪いところを、キツイ言葉で言いあう。しかしそれは傍から聞いても只の悪口で、どう解釈してもお互いを高め合うようなセリフは聞こえてこない。

齋藤は2人よりもだいたい遅くに始めたため、止めるにも話していることがよく分からなかった。昔のように、となんとか間を取り持とうとしたが、「ルールもろくに知らん奴が話に入るな！」と払われてしまった。

どう頑固で意地っ張りで、こだわりが強い性格をこじらせればあのような激しい喧嘩ができるのだろうか。

昔からそんな2人の姿を知っているからこそ、齋藤は隣で顔を青くして落ち着かない様子を見せている嶺井を大変不自然だと感じていた。

だってそうだろう。大声で猫について激論できるような人間が、どうして自分より震えているのだろうか。

事情を知っているとしか考えられない。

友人を疑いたくはないのだが、齋藤は嶺井が犯人なのではないかと考えた。

どう自首させようか。齋藤は高木に「心当たりはありません」と答えながら考えた。

11、推理は整理、勘は無計画に。

コナンは顎に手を添え、考えていた。

謎はなんだ？ まずはまとめよう。

・犯行に使われた凶器はどこへ行つた？

・犯人の動機はなんだ？

・どうやって家に侵入したのか？ 出たのか？

とりあえずこんな感じだろうか。分かるものから一つひとつ解いていこう。

一つ、犯人の動機はなんだ？

遺体を見た感じだと、怨恨の線が強い。鈍器で頭部を3度も打たれている。つまり被害者に相当な恨みを持った者の犯行だ。

家が荒らされた形跡も見られない。つまり最初から笠原を殺すことが目的なのが分かる。ということは犯人は笠原と面識のある人物で、なおかつ深い関わりがある人物だ。

一つ、どうやって家に侵入したか、出たか。

家の中をあらかた見て回ったが、どこにもこじ開けられたような痕跡はない。つまり玄関か庭の大きな窓から入ったということだろう。つまり顔見知り。

先程の推理と合わせると、親しい間柄なのがわかる。入るのは簡単だったろう。しかし出るときは余裕がなかったか、鍵が無かったかで鍵を閉めることができなかった。それで自分たちは容易にここへ入ることができた。

今分かる事で考えられるのはここまでだ。ここから先はまた情報を手に入れなければならない。

コナンは千葉が連れてきた二人の老人を見る。背が高く、少々キツめの顔つきをしているのが嶺井 兼明。目暮警部よりかではないが恰幅の良い、優しげな顔をしているのが斎藤 哲次だ。

コナンは嶺井を注視する。その嶺井はどこか落ち着かない様子であたりを見回していた。

聞けば、彼らは被害者の笠原の昔からの友人らしい。

笠原の子供は遠くにいて、犯行は不可能。妻はそもそも亡くなっている。それら以外に親しい間柄なのは……。

犯人はこの中にいる。あとは凶器だ。それを隠した場所も探さなければならぬ。……おそらく凶器は犯人が持ち去ってしまったのだろう。

それでも、もう一度家の中を見て回らなければ。今度は直也も誘おうかとあたりを見たコナンが彼を見つけたとき、直也はテレビ近くの本棚の前に立っていた。

「どこか」

直也は天井までであろうかという大きな本棚の前に立っていた。ホリがかぶらないようにとかけられた本棚の中には趣味のものか、ゴルフ雑誌やクラブのカタログ、他にもハードカバーの書物が置かれている。相当本が好きな人らしい。

そんな大きな本棚が三つも並んでいる姿は少々威圧的で、多少このリビングと合っていない。

しかし直也は興味ないことには関心が行かない人間だ。では直也の関心はどこに向いているのか。それはまだ直也本人にも分かっていない。

「どこだ？」

本棚の前で少しの間悩んだあと、直也はためらいなく本棚にかけられた薄手のカーテンを取り払った。

後ろで千葉が焦った声で「何やってるんだ！ 止めなさい！」というが、直也の耳には届かない。いつぞやの時のように、完全に外界の感覚をシャットアウトしているらしい。

直也は背後の千葉が止めるのを余所に、本棚とその周りを注意深く観察する。

本棚自体は一見何も変哲もない、ごく一般的な作りだ。決してどこ

かの本を押すとどこか秘密の場所が開く、といったようなふざけた仕掛けは施されていそうにない。そもそもこの本棚は後付け。壁にピッタリついているわけではない。

壁も同様に、何か特殊な仕掛けが施されたような痕は見られない。直也は首をひねる。このあたりに何かあることは間違いないのだ。なんせ自分の勘がそう告げているのだから。間違いないのだ。

「チツ……じゃあ、何があるっていうのさ」

なにか掴めそうなのに掴めない、そんなもどかしい感情が直也の胸を支配していく。その感情を吐き出すように、直也は垂らしていた右手で握り拳を作り、力を込めて壁を殴る。もちろん、痛くない程度にだけ。

〈ドオン……〉

「ん？」

直也は違和感をまたもや覚えた。今度は分かる。音だ。普通の壁を叩いた時よりも、どこか低いような、空気があるような、そんな音がした。

確かめるためにもう何度か叩く。やはり違う。この本棚の奥に、まだ何か空間がある。

直也はにやける顔を抑えることができなかった。

この奥に何かある。ではそこに行くにはどうしたらいいか。

勘は直也を決して裏切らない。

「な、何をしてるんだ？」

「さあ、僕たちが見つけられないものでも見つけたんじゃない？」

千葉の疑問に応えたのはコナンだった。コナンもまた、直也の行動の意味を理解しきってはいないが、直也が意味のある行動以外しないというのは、探偵団の皆と行ったあの試験を思い返せば分かる。

特に、自分の世界に入り込んでしまったこの状態では。

「見つけれないもの……？ それよりコナン君、彼、何度呼びかけても応えてくれないんだけど……」

「僕も今日初めてあったばかりだからよく分からないけれど、たまにこんなふうになるよ。気にしなくていいと思う」

「そうなのかい……」

千葉は戸惑う様子を隠そうともせず、直也を見てただ困惑していた。

普通そうだよな、とコナンはそんな様子の千葉を置いて、今度は本棚の下を覗き込もうとしている直也に声をかけた。

「直也さーん。何してるの？」

「……………」

やはりというべきか、直也は反応を示してはくれなかったが。

12、やがて勘は彼に思考させる。

何故こんなことをしてしまったのか。いつ自分は、自分たちは道を踏み外してしまったのか。

嶺井は1人、苦しんでいた。

昔から、嶺井と笠原はぶつかり合っていた。

些細なことで喧嘩もし、たまに斎藤も交えて討議も行った。お互い、考えることが違っていた。それでも、必ずどこかで馬が合い、仲が良かったはずだった。

しかし、年齢を重ねるにつれ、性格が変わったのか、生活で何か不満でもあったのか、もしくは、だんだん上手くやれなくなったのか。

嶺井と笠原は、ただ、喧嘩することが多くなっていた。発する言葉には優しさがなくなり、相手を傷つけるだけとなった。昔は探していた相手の良いところを、妬みの一因としていた。

しかし、こんなことをしていたのは自分だけだったことにも、嶺井は気づいていた。斎藤がいない時、笠原は喧嘩の合間に「もう止めないか」とこぼしていたのだ。

嶺井も分かっていたのだ。自分と笠原の喧嘩に意味がないことなど。しかし、それを笠原に言われるとどうしてか腹が立った。そうして無益な言い争いを続けたのだ。

馬が合わないのではない。単に嶺井が笠原に恨み、嫉妬、悪意を持っていったのだ。

嶺井は自身でもう既に答えを出していた。はつきりしよう。笠原を殺したのは嶺井だ。近くにあったゴルフクラブで笠原を殴り殺したのだ。そこに計画性もなかった。しかし普段から持っていた殺意が嶺井を動かした。証拠もできる限り隠滅したし、誰にも見られずに現場から逃げる事ができた。凶器もこの家のことを知らない人間には決して分からない場所に隠した。

長年敵対していた人間を殺せたことに嶺井はしばしの間幸福感に満たされていた。あくまで、しばしの間。

ふと我に返ると、嶺井は激しい後悔に襲われた。自分はなんてことをしたんだと。友人を、幼い頃から共にいた親友を、自分はこの手で殺してしまったのだ。

笠原と討議することも、自分が、二度と出来なくさせてしまったのだ。

嶺井が激しく後悔している間に警察が訪れ、数時間前まで居た笠原の家に連れてこられた。

そして今、警察に「犯人に心当たりはないか」などと答えが分かりきった質問をされた。

嶺井は覚悟を決めた。今、目の前にいる刑事に自白しよう。

一種のけじめで、これから償うために、これまでの生活との区切りを付けるために。

伏せていた頭を上げると嶺井はどきりとした。2人の小学生と自分をここに連れてきた警察官が、巨大な本棚の前に立っていたからだ。

違和感の原因を直也は納得していた。

最初の違和感は「窓」だった。

始めこの家を訪れたとき、一度家の周りを探索した。

その時、直也は家の側面に小さい窓があったのを目撃した。最初は気にも留めなかったが、家の中に入るとそこには天井スレスレまで高さがある本棚がなんと三つもあるではないか。

あの窓は一体何だったのかという話だ。

二つ目の違和感はその「本棚」だ。

わざわざ大きい本棚で窓を隠す意味はあるのか？　そこで直也は考えた。

そもそも、隣も民家であるのに、しかも近くに更に大きい窓があるというのに、明かり取りの役割しかないような小さい窓など必要だったのだろうか。いや、隣の民家で光が入ってこない以上、明かり取りの役割も果たせない。

しかし、そんな意味もないような窓を隠すためだからといって、巨大な本棚を設置する理由にもならない。

これはほかに何か別の役割があるのだ。

そうでなければ、これは一体何なのだ。

直也は本棚の下にあるキャスターを見て1人笑う。

勘が確信に変わる。

直也はそのキャスターに手を伸ばし、かかっていたロックを外す。四隅と真ん中に取り付けられたモノのうち、前方だけを外す。後方のキャスターには手が届かないということもあるが、老人が、嶺井がそこまで気が回るとは考えられなかったからだ。

3つ全ての本棚のキャスターのロックを外したあと、直也は一息つきながら立ち上がった。

後はこれを動かすだけ。直也の心は舞い上がる。

「なんでキャスターが本棚に……」

千葉の発したその声でようやく背後の人間の存在に気づいた。直也はそちらを向き、また笑う。

「ねえコナン君……は、さすがに無理だから、隣の刑事さん。本棚動かすの手伝ってよ」

千葉はそう言った直也に底知れない恐怖を感じた。

「助けてあげるからね、ルールー」

直也と千葉はいよいよ本棚を動かし始めた。

そこに現れたのは、1つの引き戸だった。

13、秘密部屋に押し込まれていたのは。

「ひ、引き戸お？」

嶺井と斎藤に事情聴取を行っていた高木が上ずった声を上げる。本棚の後ろから突然現れた扉に驚いたからだ。

「じゃ、開けようか」

「ちよ、ちよっと待ってくれ君！ どうしてここに引き戸があるって分かったんだい？」

「どうしてって……勘だよ」

千葉の問いに直也は冷たくそう答えた。それから直也は引き戸の取っ手に手をかけ、開く。

開いた扉からのものと、取り付けられているもののほとんど意味をなさない明かり窓からしか光源がない暗いそこには、漂う埃と、先ほど嫌なほど嗅いだ血の匂いが充満していた。

「物置きか、ここは」

「埃臭いだけじゃなくって、やけに血の臭いがするよ？ あ、千葉刑事、あれ！」

「あれ？」

コナンが指し示す先には、何やら新聞紙に包まれた細長い棒のようなものがあつた。千葉は壁に立てかけられていたそれを手に取る。

「千葉、それちよっと見せてくれ」

「はい」

千葉は物置から出て、高木と目黒警部にそれを差し出す。明るいとこで改めて確認すると、それには赤黒いものが付着していた。慌てて新聞紙に手をかけると、中から現れたのは、乾いた血のついた、ゴルフクラブだった。

「まさかこれって!？」

「凶器か!？」

彼らがそう声を上げたことで嶺井の肩が跳ねた。その様子を見た斎藤は落胆から溜め息をついた。

「……嶺井」

「！ な、なんだ、斎藤」

後ろを向いた嶺井が見たのは、自分を憎むような目をする斎藤だった。

「お前だな？ 笠原を殺したのは」

「っ……！！」

嶺井は恐怖した。斎藤が自分を犯人呼ばわりしたゆえに、警察、第一発見者の小学生らに疑いの目を向けられたからだ。

「な、何を馬鹿な……まさかお前がそんな愚かな……」

動揺し震える声でなんとか否定してみれば、なんと斎藤はため息を盛大に吐いたではないか。

「嶺井……もしお前が犯人でないとするなら、どうしてお前は動揺するんだ。どうしてすぐに否定しない。お前は自分と反対の意見には激しく反論する奴だっただろう？」

「っー」

斎藤の指摘したとおりだ。普段の嶺井であればすぐに口を開き、相手に反論させないとばかりの勢いで意見する。嶺井はそうすることを楽しむとすると同時に、それができる自分のことを誇りに思っていた。それができていないことを指摘された今、嶺井は屈辱感を覚えた。しかし、嶺井はまだ冷静さを失っていないかった。

何を焦る必要があるのか。自分の反応は自然なことなのだから。

「べ、別に何のことはない。斎藤、お前だって自分が犯人扱いされたら動揺するだろう？ それも親友の殺人事件でだ。自慢の饒舌だって固まるってもんだ」

そうだ。自分は親友を犯罪者に殺された悲しい関係者。動揺したって何らおかしいことはない。警察から、無垢な小学生から、そして親友から睨まれたとしても、自分は落ち着いて自分でいればいいのだ。

「考えてもみてくれ。確かに俺は笠原に恨みを持っていた。しかし、それはせいぜい喧嘩のネタにはなっても、殺人の動機になりうるほどのものか嶺井？ 違うだろう。それに俺たちは何度かこの家に訪れ

ることはあつたが、この物置のことは知らなかったんだぞ？ 知らない場所に俺が凶器を隠せるとでも？」

「じゃあ外から来た犯人にも無理だよな。わざわざこんな大きい本棚で隠されたこの物置に、凶器を隠すなんてさ」

嶺井の反論を止めたのはコナンだった。

「なっ!？」

嶺井は心底驚いた。見るからに利発そうな子供ではあるが、まさかこの状況に口を出すとは思わなかったのだ。思わず唾液を飲み込み、自身の心臓が胸が痛くなるほど叩いているのを感じていると、コナンは更に続けた。

「それにさ、おかしいんだよね」

「何がだい？ コナン君」

「もし犯人が外から来た強盗だったりしたら、家がこんなに綺麗なのはおかしいなって。それにこの家を隅々まで見たんだけど、どこにも鍵をこじ開けた箇所がないんだ。だとしたら犯人って、玄関から堂々と入ってきたことになるよね？ 普通おかしくない？」

このガキ……! 嶺井は自身の怒りを落ち着かせることに精一杯だった。歯軋りがひどくなったことに気づいて、ようやく心を落ち着かせようと試みた。

「それにね、あそこのダイニングテーブルには冷めたコーヒーの入ったコーヒーマーカー、キッチンには洗われたカップが2つ。これってもしかして、笠原さんとお客さんに出されたものじゃないかな？」

「お客さん……う？」

「うん。……もしかしたら、犯人かもね」

コナンに自信満々な視線を向けられた嶺井は、自身の体を巡る血液が熱を発するのを感じた。

14、言い訳野郎はついに覚悟する。

嶺井はハントツと嘲笑った。

「これから自分を殺そうとしている相手にわざわざ飲み物を出すのか？ 訳の分からないことを言うな坊主。だいたい、そのコーヒ―は客にも出されたかもしれんが、その客が帰ったあとで、あとから来た別の人間に笠原は殺されたのかもしれないんだぞ？ いや、この考えの方が的を得ているぞ」

嶺井は焦りを心の中に隠しながら、余裕綽々といった様でコナンに反論してみせる。してやったとほくそ笑んでみるが、コナンはへらつと笑ってかわす。

「もー、本気に取らないでよー。それともなあに？ もしかして凶星だった？」

コナンが首をかしげて笑って見せれば、嶺井は屈辱に思うのと同時に、しまった、と焦った。子供の戯言に何故ムキになって相手しているのか。笑って聞き流せばよかったのに。

焦るな。落ち着け。怒りで我を忘れてはいけない。笑え。たかだか子供の言うことだ。

「はっはっは。凶星もなにも、私が笠原の家に来たのは、今日はこれが初めてなんだぞ？ 私の考えも想像に過ぎないぞ？ 坊主の考えもな」

「うん、そうかもね」

嶺井が笑えば、コナンは納得いかない様子ではあるがそれに同調した。嶺井は胸をなで下ろした。どうにか目の前の子供を黙らせることに成功したと思ったからだ。

しかしどうするか。家の中を荒らしてなどいないから、空き巣の犯行にごまかすことはできない。となると、財産目当てではなく、笠原自身に恨みのある者の犯行と警察は考えるに違いない。ならば犯人は親しい者に絞られてくる。その中には当然、自分も含まれている。

くそ！ どうやってごまかす?! 凶器も見つかってしまっているのに！ 幸い、どこか冷めていた頭が指紋を拭き取っているから、あ

のゴルフクラブから俺を導き出すことはできないだろう。コーヒークップは念入りに洗った。唾液なんかをあそこから検出することはできないはず……。ああ、早く家に戻って、あれを燃やさなければ!! 嶺井が衰えぬ回転で頭を動かして考え込んでいるそばで、斎藤は心の中で祈っていた。嶺井がどうか、ここで自首してくれないか。誰か、この衰れた親友に手を差し伸べてはくれまいか。今の嶺井では自分の言葉なぞ届かないだろう。親友に何もできない自分が情けなくなり、斎藤はただ顔を伏せた。

コナンは冷静になろうと努めた。可能性は低いだろうが、万が一、冤罪を生んでは元子もないからだ。

被害者の笠原と顔なじみで、尚且つ被害者に恨みのある人物。警察が連れてきたということは、この二人のどちらかということではないだろう。

隠し扉が見つかったとき。凶器が発見されたとき。どちらがより不審な動きを見せた? ああそうだ。

だが、証拠がない。

凶器のゴルフクラブには血こそついていたが、指紋は拭けばふき取ってしまうだろう。むしろなぜ血は新聞紙で包んで、そのままにしていたんだ。もしやクラブは指紋なんかも残っているのか?

いや、どうだろう。コーヒーを飲んでいたのでろうカップは洗われていた。おそらくそれは、カップから指紋や唾液などが検出されないようにと、証拠隠滅を図るためだろう。洗った後はタオルか何かで指紋を拭き取っただろう。

……拭き取った? 何で? キッチンペーパーか? この家にあるタオルのどれかか? 自身のハンカチか? それとも他の布で?

犯行現場からは計画性は感じられない。自分の家からタオルを持ってきてなんかいなかったのではないか? じゃあ、その拭き取った布はどこに行った? キッチンペーパーなんかでやってたら絶望的だが、ごみ箱には使われたであろう濡れた紙はなかった。持って帰るだろうか、そんなごみを普通。

待てよ? もしキッチンペーパーが使われていたとして、それはど

んな状況下だ。そうだ、カップを洗った時だ。洗ったということは、濡れた手でそれを触ったということだ。仮に濡れていなかったとしても、紙には指紋が残る。

キッチンペーパーが使われていなかったとして。だとしても使われたものが絞られる結果になるだけだ。可能性は確実に潰していかなくちゃな。

そこまで考えてコナンはキッチンへ向かう。その背後では目黒警部が嶺井と斎藤を警察署に行くように促していた。

「嶺井さん、斎藤さん。話を伺いたかったので署のほうに、ご同行していただけますな?」

「それは強制か?」

「いや、任意ではありませんが、自身にかけられた疑いを晴らしたいなら、署で正直に話されたほうがいいですよ?」

「任意なら断る! 私を帰る」

嶺井が拒否の意思を示すと、隣で斎藤が大げさにため息を吐いた。

「嶺井。分かっているのか? お前は今、笠原を殺した疑いがかかっているんだぞ」

「勝手に言いだしたのはお前のほうだろう。むしろお前のほうが怪しいんじゃないか? むやみに私に疑いの目を向けるようなことをしやがって! お前のほうが怪しいじゃないか!」

「俺は笠原が殺された時には会社に居た! 社員に聞けば証明してくれるだろう。それに俺には動機がない! あるのはお前のほうじゃないか!」

「言つたろう! 笠原に恨みはあっても、殺意まで抱くものじゃないと!!」

「嶺井さん。話は署のほうで」

「断る! 私を帰る!」

嶺井は何が何でも警察署には行かないと主張する。ただの頑固な主張にも見えたが、見る人が見れば、その姿は怯えているようにも見えた。

嶺井の主張が怯えたものにしか見えなかった人間が、声を荒げた。

「この、意気地なし!!」

「い、意気地なしだとおっ!？」

嶺井は憤慨した。いい加減、怒りの沸点が頂点に達したからだ。

「い、いい加減にしろよ貴様ら！ 人を殺人者に仕立てあげようとして、意気地なしとかなんとか言いがかりをつけよって!! 名誉棄損で訴えるぞ!!」

「うっせえっ!! 意気地なしは意気地なしだ!!」

「このガキツ!!」

冷静な判断のできない状態の嶺井は直也に殴りかかろうとした。幸いそれは、高木と斎藤に遮られ、直也に直接被害が行くことはなかった。騒ぎを聞いたコナンもそこに駆けつけ、唸る直也を宥める。高木もそれに倣う。

「ダメじゃないか直也君。怒らせちゃ」

「ホントのことを言って何が悪い。俺は急いでんだ」

「直也君……?」

焦った様子 of 直也に違和感を感じた高木は、改めて直也を注視する。違和感はすぐにわかった。直也のTシャツの下半分が不自然に捲られ、袋状になったそこに、白と赤黒い色の小さな何か、大切にうに包まれていたのだ。

「直也君、それは……?」

〈みゃ…お〉

「!!?」

猫のか細い鳴き声が、小さい何かから聞こえてきた。高木の、いや、そこにいるすべての人間に衝撃が走った。

「な、ね、猫? なんで猫がここに?」

「しらねえよ。けど俺がここに来たのはこの子を探してたからだ。刑事さん、俺帰るから」

「え?」

「何? この子を見つけたらここに用はないんだけど」

口調が変わってるような……。高木の中に生まれた新たな違和感
は払拭されぬまま、直也はリビングから玄関に向かって歩き始めた。
赤黒いものは、血だろうか。ならあのか細い鳴き声のことも考える
と、あの猫は怪我をしていることになる。それも、多量の血を流すよ
うなけがを。

猫の様子が見えた者たちには、それを抱える直也を引き留めること
などできなかつた。

だというのに、直也は足を止め、嶺井たちのほうに振り向いた。

「意気地なしのおじいさん」

「あ!」

「直也君!」

高木がまた直也に注意する。それも聞こえなかつたかのように直
也は高木の声を無視し、嶺井を蔑んだ目で見る。

「あんた何しに来たの?」

「!」

それだけを言うと、直也はコナンを呼んで、今度こそ玄関のほうに
向かい、家から出て行った。

千葉は戸惑っていた。直也が嶺井に対して言っていた、「何しに来
たの?」という発言が彼にはよく分からなかつたからだ。

彼が戸惑うのも無理はない。重要参考人として、嶺井を連れてきた
のは彼だからだ。何しに来たのかと嶺井に言っても、話をしにきたと
しか嶺井は答えられないはずだ。

と、千葉は悩んでいた。しかし、言われた本人を見て、その考えは
覆された。

嶺井は顔を伏せていた。のぞき込めば、顔にあった自信、笑顔、怒

り、恐怖などの感情がすべてごっそり抜け落ちたような、抜け殻のよ
うな顔をしているのが伺えた。

嶺井は思い出した。この隣にいる、ふくよかな刑事が自分をこの家
に連れていく車の中で、何を決意していたのかを。

「嶺井さん？」

「……」

嶺井は自分に失望していた。また自分はやってしまった。いらな
い見栄のために嘘をついてしまった。

見栄など、プライドなどあっても意味がない。自分は、人として
やってはならないことをした、愚か者なのだから。

嶺井はゆっくり顔をあげ、口を動かした。

「笠原を殺したのは、私です」と。

事件は大きく動いた。犯人が出てきたのだから当然だ。嶺井は洗
いざらい全て話した。動機は自分の悪口を言われたこと。普段から
殺意を持っていたこと。凶器、証拠は意図して隠滅しようとしたこ
と。そのとき居合わせた猫も、唸るように鳴かれたから、同じゴルフ
クラブで殴ったこと。警察署に頑としてでも行こうとしなかったの
は、自宅に、指紋を消すために使った、笠原の家のタオルが置いてあつ
たからだと話した。

なぜクラブの血を拭かなかったのかと問われて、嶺井は一旦、口を
噤んだ。しかし言葉を探るようにポツリポツリと話したことは、要約
すればこういうことだった。

「その血に触れば、自分が人間じゃなくなると、そのときは思った」

そのあとに続いた、「ゴルフクラブに手を伸ばした時点で、自分は人
間じゃなくなっていたんだろうが」という言葉を発した身体は、そこ
から魂が抜け落ちたように、生気がまるで感じられなかった。

15、疲れは後からやってきた。

事件のあった次の日。ある者たちにとっては憂鬱な日であっても、世間は何食わぬ顔で彼らの前を過ぎていく。

それは学校であっても同じことだ。憂鬱な彼らを心配する目はあっても、楽しそうな事件が起これば、すぐさまそれに目が行ってしまった。憂鬱な彼らはしばし、世間から置いて行かれるのであった。

しかし、時間が過ぎるということは、学校も刻一刻と終わりに近づいていることになる。時計を見るのが、憂鬱な彼らにとって慰めであり、苛立ちの基であった。

放課後が訪れたことを告げるチャイムの音が、憂鬱な彼らの一番待っていた鐘の音だ。

ランドセルの準備はできている。すぐさまこの教室から飛び出したかった。だが急いでいても仕方ないことには気が付いていた。きつと彼らもいるのだから、と。

彼らは靴箱で憂鬱な彼らを待ち伏せしていた。いや少し説明が足りない。憂鬱な彼らを待っていた彼らもまた、憂鬱な者たちだった。

「楓太お兄さん、泰輝お兄さん。あの、猫ちゃん、どうなったの……？」
心配そうに楓太と泰輝を見る彼らは、自分たちのことを少年探偵団と呼んでいる集団であった。

彼らは前日、楓太が依頼した猫探しを行い、発見されたその猫の怪我の様子が気になっているのだ。見つけたのは彼らではなかったものの、白いと聞かされていた猫が赤く染まっているとなれば、それが大きな怪我を負っているという考えになるのが自然だ。

一晩経ったこの日、猫の生死がどうなったかを尋ねに来たのだと、楓太はあまり働かない頭で導き出した。

「大丈夫、生きてるよ」

「ほ、本当!? よかった〜」

「安心しました……」

「ホントに心配したぜ〜 よかったな楓太兄ちゃん！」

「うん。でも、三か月は入院だつて」

「そつか……、あんな大げがだもんね」

「仕方ありません、か……」

「なんだよ犯人のやつ！ 関係ねえ猫にまで手を出すなんてよー」と憤慨する元太とそれに同調する光彦と歩美を見て二人は、優しくて正義感のある子たちだと、騒ぎ立った心が少しだけ風いだ。

楓太と泰輝が靴を上履きから持ち替えていると、今度はコナンが彼らに尋ねた。

「ねえ、泰輝お兄さん」

「ん？」

「……直也さんは？」

「……」

泰輝は靴を持ったまま動きを止める。そのすぐ後ろでは楓太も、靴箱の前で項垂れていた。

「た、泰輝お兄さん？」

声を掛けられて気を取り戻した泰輝だったが、心配そうに顔を覗き込んでいくコナンの顔が彼は見られなかった。怖かったのだ。

履きやすさを重視した、マジックテープ式の靴を履きながら泰輝は答えた。

「直也は今日、休んでる。昨日のことがやっぱり、シヨックだったんだろ」

「……そつか。そりやそうだよね」

「僕らだって初めて見たときはシヨックで動けませんでしたもんね」

「怖かったよね……」

「俺、しばらくは食欲なくなっただもんなく」

「初めて見たときは」

泰輝は鳥肌が立った。彼らは何度も、そういう現場に鉢合わせたことがあると言外に言われたからだ。つまり、何度も凄惨な死に方をした遺体を見たことがあると。

少年探偵団の噂の一つにあった、殺人事件をいくつも解決しているという噂は、真実だったのだ。

泰輝はやるせない気持ちになった。自ら飛び込んで行ってるにしても、どうして自分たちより小さいこの子たちが、凄惨な現実をその無垢な瞳に映しているのか。

見なくたっていいじゃないか。

慣れは怖い。

事実、その状況に全く耐性のなかった直也は寝込んでしまうほどのショックを受けた。当たり前だ。悪意に殺された人間なんてそうそう見ることはない――

泰輝は思い出した。そして、案外見ることは多いかもしれないと思いついた。

ここは米花町。ほかの地域よりダントツに、事件発生率の高い町だ。

いつどこで誰かが死んでもおかしくないし、それを見てもおかしくない。

昨日はその可能性に直也がぶち当たっただけなんだ。

「そっかー。直也お兄さんお休みなんだー」

「せっかくこれ、作ってきたんですけどねー」

「仕方ないわね。来た時に渡しませう」

「今日チョー頑張ったのに、今日渡せないのはなんかやだなー」

「だよねー」

「渡す？ 直也に？」

泰輝が考え込んでいる間にも、探偵団は自分たちの会話をしていった。その会話を聞いていた楓太は気になる個所をその中から引き上げた。

よく見てみれば、歩美の手には筒状に丸められた画用紙があった。楓太は気が付いた。だが何も言わなかった。言わなくたって、どうせその正体はすぐわかんと思っただからだ。

「ねえみんな。僕らこれから直也ん家に行くんだけどさ、一緒に来る

？」

誘えば、楓太の思い通り、探偵団は元気よく返事した。

16、励まし隊と、トラウマ君。

コンツ、コンツ

「母親と思しき女性が、部屋の扉を叩く。女性は、今向こうで怖がっているであろうこの部屋の主を刺激しないようにと、優しい声で要件を言う。」

「直也ー。お友達来てるけど、会う？」

扉の向こうの人物は答ええない。布と布団のこすれる音が聞こえてくる。寝返りか。寝ているのだろうか。それなら仕方ないかと、来た道を引き返そうとする母親のその背中に、直也の声がかかった。

「待って、お母さん。なんて言ったの？」

返事が返ってきて母親は安心した。息子は今起きたのだろう。起こしたのなら悪いことをしてしまった。

「泰輝君と楓太君と、ちっちゃい子たちが来てるの。……無理しないでいいからね？ 断ろうか？」

「ううん。会う」

「そう……上がるように言うね？」

「うん。ありがとう」

母親は安心した。どうやら幾分かは回復したように思えたからだ。

朝は大変だった。いくら呼んでも部屋から出ず、「外に出たくない」と言い出して困り果てた。涙声なことに気が付いた娘が扉越しで尋ねてみれば、直也は「怖い」と言った。

確かに、昨夜から直也の様子はおかしくなっていた。当然だ。悲惨な死体を間近で見ってしまったのだ。おかしくならないほうがおかしい。だが、昨夜はここまで酷く荒れてはいなかったのも事実だ。

恐怖がよみがえったのか。夢に出てきてしまったのか。

なんにせよ、この状態では学校に行かせられない（元々休ませるつもりだった）と判断した母親は、熱まで出してしまった息子の看病をするしかなかった。

友達が来て、直也の心にゆとりができたらしきと、恐怖心も和らぐのではないか。だから安心したのだ。会ってくれる様子でよかった。

二階の階段から降りて、母親は玄関で待っていた彼らの下へ向かう。

「泰輝君、楓太君、探偵団のみんな。部屋に上がっていいわよ」

「だ、大丈夫なんですか？」

「まだ回復してないなら俺ら別に……」

「むしろ会ってあげて。あの子かなりやられてて。みんなで励ましてくれると嬉しいな」

「わ、分かりました！」

「お前らの出番だ！ 部屋に行くぞ！」

「「おう!!」」

珍しく湿っぽかった彼らだったが、直也の母親のGOサインを受けたとたん、息を吹き返したように動き出し、玄関で靴を脱ぎ始めた。

それがおかしかった母親は思わず笑ってしまったが、あることを忠告しなければいけないことを思い出した。

「探偵団のみんな！」

「はい、なんでしよう？」

「なんですかー？」

「あのね、部屋に入ったら多分、すごいものを見ると思うけど、今日は気にしないであげてね」

「??？」

やっぱりわからないわよね。母親はそれでも「今日はその説明はできないと思うから、お願いね」と、彼らに念押しし、階段を上ることを催促した。

忠告された光彦たちは首を傾げた。

「いったい何なんでしょうね？ すごいものって」

「なんだろうね。でも、今日は気にしないでって言われちゃったし、それ無視したほうがいいよね」

「そうね。それに私たちはお見舞いに来たわけだし、まだ回復してい

ないみたいだし、長居はしちゃだめね」

「そうだよな。あくあ。盛大にやってやりたかったのにな」

「ですよ〜」

元太たちは肩を落としたり。その光景をほほえましく見ながら、楓太は彼らを直也の部屋に来るように声をかけた。

扉の開いた部屋の前で、探偵団は絶句した。

誰の予想もつかないものが、扉の向かいの壁に貼ってあったからだ。

コナンは放心したがすぐに意識を取り戻し、同じく放心していた探偵団に直也の母に言われたことを思い出させた。今は気にしないでおこう。

余談だが、探偵団を絶句させたのは巨大なポスターで、描かれていたのは等身大の怪盗キッドだった。今は深く触れない。

顔をそらした先に見えたのは、ベッドに腰かけている真っ青な顔色の直也だった。ほんのわずかに口角が上がっているが、それはかなり無理をしようやくできた笑顔なのだということが小学生にも分かった。

「直也お兄ちゃん、大丈夫？」

「……正直、きつい。トラウマになってる」

歩美がそんな直也の様子を心配し尋ねる。

直也は歩美の顔を見て、そのあと顔を伏せた。苦痛に耐えるように顔を歪めて。

「トラウマ？ 昨日のこと？」

「うん。……僕、初めて見たよ。人があんな風に、悪意、殺意に殺されたところなんて……。……怖いよ。もう、ドア開けたくない」

直也は体にかけていた毛布に顔をうずめた。コナンには直也のその様子で自分たちよりもずっと、直也が小さく見えた。

だがそれよりも、コナンは直也の発言の中に不思議なものがあつた

ことを聞きのがさなかった。

「ドアを開けたくないって、どういふこと？」

17、彼は普通の少年なのだ。

「ドアを開けたくないって、どういうこと？」

直也は毛布から少しだけ顔を上げた。発言したコナンは少し身震いをする。直也に睨まれた気がしたからだ。「なぜ？」と考える前に直也は口を開いた。

「コナン君は、もう、慣れてしまったの？」

「慣れた……？」

「あ、ああ、そうか、君ってあの探偵の毛利小五郎のところに住んでるんだっけ……。じゃあやっぱり、見る機会は多かったんだね……」

「何を……？」

疑問を口にしたものの、コナンには思い当たる節があった。

「遺体」

直也は咎めるようにコナンを見ていた。しかし何も言わない。いや、何かを言いたそうにしているのだが、唇は糸で縫われたように開かない（ようにコナンには見えた）。

コナンと直也の睨み合いは思ったよりは続かなかった。もともと青かった顔色をさらに悪くして、直也は隣で座っている颯太にもたれ掛かった。

「大丈夫？ まだ気分悪い？」

「ううん、大丈夫……。……質問に、答えて無かったよね。……言わないとだめだよね」

「え？」

コナンを含むそこにいる直也以外の人間は驚いた。今さっき答えたではないかと。そこでコナンは思い出した。自分はさっき、「ドアを開けたくないとはどういうことか」と尋ねたことを。

しかし、思い出させて大丈夫だろうか。現場にいたときも一度吐いていた。心身共にダメージが大きい。昨日は颯太の猫を探す、助けるという目的があったためにそこまで遺体に関心が行かなくてすんだいたようだが、それがなくなつた今、精神的なダメージは今のほうが大きそうだ。夢にだって出てきたかもしれない。

歩美たちのような子供はまだ死を完全には理解していない。蘭たちほどの年齢になると死が何なのかはわかるし、それを受け止めることができる。

では、直也ほどの年齢ではどうだろう。

おそらくだが、死が何かは何となくわかっている。しかしそれが受け入れられるかどうかは経験によるのではないか。そして直也はその経験がなかった。ゆえに、トラウマになった。

「……言いたくないなあ」

言わせるべきだ。トラウマを克服させるならその体験を受け入れなければならぬ。受け入れるならその体験を口に出したほうがいい。いつまでも自分の中に押しとどめるよりずっと。

「べ、別に無理しなくていいんですよ!?!」

「思い出したくないなら忘れちまおうぜ!?! ほ、ほら、好きなものをたーつくさん食べるとかさ!」

「そうだよ！　ね、直也お兄ちゃん、好きなお菓子何？　歩美たち買ってくるよ!」

探偵団の三人は弱っている直也を気遣い、元気づけようとする。直也はその姿が嬉しそうに微笑んだが、歩美が閉まっていたドアを勢いよく開けたのを見て、その笑みが歪んだ。

「開けるなああああっ!!!」

直也が歩美に怒鳴る。歩美は驚きドアノブから手を放し、直也のほうを見る。他の者もその声に驚き、同じく直也を見る。

見られた直也自身は、毛布に包まりベッドの上で小さくなり、ひどく震えていた。

おびえていた。

激しく嗚咽をあげながら、直也は自身を包む毛布の中で泣いていた。

「歩美ちゃん、ドア閉めて!」

「う、うん!」

颯太が歩美に言って部屋の扉を閉めさせる。しかし、やはりそれでも直也は泣き止まない。

完全にあの時のことを思い出してしまっている。今はまだ苦しいか。コナンはこの場にいる誰よりも小さくなってしまった直也の姿を見て心の中でつぶやいた。

一刻も早くトラウマを払拭したほうがいい。長引けば長引くほど、克服するのは難しくなる。克服できなければ、直也は自分で部屋から出ることが難しくなる。できたとしても強いストレスを感じ、やがて本当に部屋から出てこれなくなってしまう。それではいけない。

同じことを泰輝も考えていたらしい。救いを求めるように、泰輝はコナンを見ていた。

「どうしたら、いいんだ……?」

泰輝は苦しむ直也を見て泣きそうになっていた。

友人が悪いほうに様変わりしてしまったのだ。不安にもなるだろう。それが自分の手ではどうにもならないならば、絶望にも近い気持ちになるのではないのか。

コナンは答えられなかった。トラウマを払拭したほうがいいのは分かっている。だが、その方法が分からないのだ。まだ答えられない。

コナンは縫るような瞳を向けてくる泰輝から目を逸らしてしまった。

泰輝の問いに答えられるものは居らず、部屋は沈黙した。

「同じくらいのショックを受けたらどうか」

沈黙を破ったのは楓太だった。

「ショック?」

「うん。よくお話であるじゃん、人と人がぶつかって、その衝撃で人格が入れ替わっちゃう奴。で、解決法が、同じことをすること」

「ああ、あるな。……つまり?」

「だから、同じようなショックをもう一度、今度は、すごくいいことでショックを与えたらいいんじゃないかなって!」

なるほど、応用か。コナンは感心した。

確かにそれなら、こちらが環境を整えることで簡単に舞台は用意できる。しかも今日は直也にとって良い知らせを持ってきている。格好の機会だし、提案だ。

楓太の考えを理解した直也以外の者は期待に胸を躍らせた。目の前で苦しんでいる友人を、自分たちの手で助けられるかもしれないのだ。胸が高鳴るのも無理はない。

「……………どうやって?」

唯一、この話についてこれていない直也は不安げに楓太を見上げた。いつの間にか落ち着いたようだ。

昨日とは一転、頼りない表情をしている直也の頭を撫でて、楓太は安心させるように微笑んだ。まるで猫にやるようだと灰原はその様子を見て思った。

「僕たちに任せてよ、直也。昨日の、ルールーの件のお礼だと思って！」

「な、なにするか分からないと怖いよ……………」

「僕らにドーンっと頼ってよ! ね、泰輝、僕らは直也の何なの?」

「しんゆうでーす」

「だいせーかーい!!」

「泰輝、楓太……………」

直也はまた泣き出しそうになっていた。今度は喜びで。それを見て楓太はまた猫をむちやくちやに撫でまわすように直也の髪の毛をぐしゃぐしゃに掻き回した。抵抗する力はないのか、直也はされるがままだが、微笑んでいるので嫌ではないのだろう。灰原からすれば猫扱いを受けているようにしか見えなかったが。

楓太が直也を撫でまわしている間、泰輝は探偵団に向けて何かを企んだような悪い笑みを向けていた。その意図が分かった歩美、光彦、元太は互いの顔を見合って頷いた。

「直也、トイレ借りていいか?」

「ん、いいよ」

「ありがとう」

直也の許可をもらった泰輝は部屋から出ていく。それに続くように、「俺たちも準備するな!」と元太たちも部屋から出て行った。そのとき直也は、歩美が何かを手に持っていたのを見ていた。

「準備……」

「そりゃ、ショックを与えるなら何かしないとねー。直也は何も考えずに、リラックスしてよ」

「なるべく無防備なほうがショックは大きいかもね」

「あなたにとって悪いことは何も起こらないんだし、安心して」

「コナン君、哀ちゃん……。うん。そんなに言うんだったら、僕期待して寝てるね!」

直也は泣いて充血した目を細めて笑った。

「期待されたら、それに応えないとな」

「私たちも準備してくるわ」

「うん、お願いね二人とも!」

部屋を出ていく二人を楓太と一緒に見送った。果報は寝て待てるも言うしな。と、直也はベッドの上で伸びた。

「いいかお前ら。次にあの扉が開いたら間髪入れずにこれを鳴らせ。いいな?」

「ハイ!」

「うん!」

「まかせろ!」

「よろしい! じゃあ俺は部屋に戻る。探偵団の諸君。検討を祈る」

「ラジャー!」

泰輝の激励に探偵団の三人は張り切って応えた。コナンと灰原は応えなかったものの、手にしたものを見て微笑んだ。

とはいえ、失敗は許されない。あの光景を上回る衝撃を与えなければならぬからだ。コナンは気合を入れなおした。

18、衝撃には衝撃を。

〈泰輝視点〉

「用意は出来てるか、直也」

扉の奥が見えないように、体を横にして隙間を潜るように入室する。ベッドの上で蹲っていた筈の直也は、リラックスした様子で寝転んでいた。颯太がそうさせたんだろう。さっきまでの不安定さは無くなっていた。ただ、泣き止んではいるが、目は少し充血している。

「用意って、何すればいいの。パジャマから着替えたほうがいい？」

「うんにゃ、立ち上がれるならそれでいいぜ。あとは、そうだな。両手は空けててくれ」

「？ 分かった」

了承した直也は、首を少し傾けて、「そっちこそ、もう準備はいいの？」と聞いてきた。そうだな、こっちは準備万全、あとは俺から、あちらに合図を送るだけ。大丈夫だろう。

「大丈夫だ。お前の覚悟が決まってるならな」

「じゃあ、早速行こうか！」

余裕の見せつけか。直也は飛び起きてみせた。

「じゃあ、俺がノックして、あっちに合図を送る。それから、3からカウントダウンして、『GO!』って言ったら、一気にドアを開けるんだ。分かったな」

「了解！」

「直也、なるべく無心でね！」

「それも了解！」

颯太に支えられながら、直也はドアの前に立つ。笑って余裕ぶっつてはいるが、さっきから足元は震えている。まだ大丈夫そうだが、いつまで持つか。時間がないなら、速攻だ!!

「じゃあ、いくぞ」

合図のノックを三回。息を吸って、声をあげる。

「3！」

直也が震える手で、ドアノブを掴む。

「2！」

颯太が直也を力強く支えなおす。

「1！」

掴んだドアノブを、ひねる。

「GO!!」

立て付けのいい扉が、直也自身の手によって、勢いよく開け放たれた！

パンツパパンツ

クラツカーのはじける音が、三発。飛び出た紙吹雪が、驚いて固まっている直也の頭に、いくつか降りかかった。

そんな、呆けた直也の目の前にいるのは、少年探偵団の五人組。皆が皆、満面の笑みを浮かべて、歓迎の空気を作っている。

「直也お兄さん！」

「少年探偵団へ、ようこそ!!」

元太の手によって掲げられているのは、小学一年生らしい、まだまだどたどしい文字とクレヨンで書かれた、カラフルな賞状だ。

「え、ええ？ どうして……」

「どうしてって、本気が直也」

「合格条件、忘れちゃったの？」

目の前の光景に理解が追い付いてない直也。颯太に言われて、ようやく思い出したらしい。

「そうだった……。僕、ルール、見つけたんだ……」

それからバツと颯太に向き直って口をパクパクさせた直也。言いたいことが分かったんだろう、颯太は笑って言った。

「怪我はしてるけど、命に別状は無いつて！助けてくれて、ありがとう、直也」

「……うん！」

「さ、これで心置きなく、目の前のそれを受け入れられるな！」

直也は鼻を大きくして、息を一杯吸うと、めっちゃ嬉しそうに「う

ん！」と言った。

「こんな僕を受け入れてくれて、本当にありがとう！　これから、よろしくお願ひしますー！」

元太から賞状を受け取った直也。その満面の笑みは、安堵の色が濃かった。

「直也さん、あの時は本当にすみませんでした……」

「え、どうしたの光彦くん？」

「あの時、推理と勘は別物だ、なんて……」

「ああ、そのこと」

リビングに降りてきた俺たちは、直也のお母さんが用意してくれていたお菓子とジュースで、軽くパーティーをしていた。歓迎パーティーは別日にやるらしいから、これはトラウマ克服祝いってところか。

マフィンを食べていたら、目の前で湿っぽい話が始まった。

「事件のこと、コナン君から聞きました。直也さんは、勘と推理で、事件を解決して、猫ちゃんも助けたんですね。すごいです。そんなすごい人を、勘だけに頼ってるわけじゃない直也さんのことを、僕は……」

「気にしないで。僕、光彦君に言われて、目が覚めたんだ。勘だけに頼ってちゃいけないって。だから、昨日のことも、解決したと思ってる。落としてくれてありがとう、光彦君」

「直也さん……！」

これから仲間になるんだ。確執は少しでも少ないほうがいいよな。ちゃんと謝れて、えらいじゃん。その子の隣の、元太と歩美ちゃんも、謝ってる。いい子たちだな。

なら、あのことも謝ってくれるよなあ？

「それから、颯太さん……」

「え、ボク？」

「はい。あなたの依頼に対し、非常に失礼な態度をとったこと、本当

に、申し訳ありませんでした!!」

「ごめんなさい!」

「本当にごめんなさい!」

「ちよ、三人とも……」

うわ〜! 俺の中で探偵団の評価爆上がり!! いい子たちー!

「……謝ってくれて、ありがとう。三人の反省、ちゃんと伝わったよ。ルールのこと、一緒に探してくれて、ありがとう。そうだった!

ボク、皆に報酬渡したかったんだよ!」

「あ、そうだったな」

探偵団の三人については、夕方になるまで必死に探してくれてたから、俺も颯太も許してた。たまにちらちら、こちらを申し訳なさそうに見てたから、あの時から反省してただろうし、あんな必死に、猫がいそうなどころとかを考えながら探してる様を見せつけられたら、許さずにはいられない。渡さずにはいられない。

「ほい、仮面バイヤーの、ゴールドレンレアカード」

「二「え、ええええええっ!!」」

「探してくれた報酬と、これからもよろしくっつー、あいさつ代わりにな」

俺の宝物、大切にしてくれよな。

19、当たらずも遠からず。

トラウマ克服祝いのパーティーが幕引き、俺たちは帰路に着いた。泰輝さんと颯太さんと別れ、元太、光彦、歩美ちゃんとも別れる。探偵事務所までの道のりを、灰原と一緒に歩く。

「何か、気になることでもあるの?」

「え?」

「顔に書いてあるわよ」

顔に出たか。そうだ。俺は、まだ不思議に思っているんだ。

「なんで、直也さんは少年探偵団に入る、なんてことをするんだ? 何か、目的があるのでしょうか思えねえんだ」

「確かに、そうね。学年も違うし、普通なら入ろうとは思わないわね。自分たちで名乗ったほうが早そうだし」

「自分たちでって……。泰輝さんは『楽しそうだから』って言ってたっけ言うけど、本当かどうか、怪しいところだ。俺たちを、利用しようとしてるんじゃないか?」

「利用? 何に」

それはまだ分からない。だが、「楽しそう」という理由だけで、事件に巻き込まれてまで探偵団に入るのは、余りにもリターンが少なすぎる。直也さんは知らなかったのか? 俺たちが、いくつも殺人を含む事件に巻き込まれてきたことを。

「利用って言うなら、もしかしたら、怪盗キッド絡みかもね」

「は? なんでだよ」

「あなたも見て、驚いたじゃない。神崎さんの部屋の壁に貼られた、等身大ポスター。あれは相当なファンね」

確かに、そんなのもあったな。そのポスターの横には使い込まれたランプや、手作りらしいキッドのぬいぐるみ、他にもマジックグッズや、傷だらけのヘルメットも置いてあった。普通の子供部屋の中で、あそこだけ異様な雰囲気を漂わせていたことを覚えている。

「キッド絡みで? ファンだから、キッドに近づけるから、探偵団に?」

「探偵団というより、あなた狙いかもね」

「俺？」

「だってあなた、『キッドキラ』でしょう？」

新聞で取り上げられてしまい、俺にはその呼び名もついてしまった。そのことを知っていたとしたら……？」

「相当、演技うまいぞ、直也さん。挨拶したとき、俺に対して一時も含みを持った目線を向けてきてない。気づいてないだけかもしれないが……」

「そうね……。フフツ」

「なんだよ」

「いいええ？　もしかしたらってこと、思いついただけよ」

「もしかしたら、って、なんだよ」

灰原はクスクス笑うだけで、答えを教えてくれない。推理してみようと思ったが、やっぱりよくわからない。「降参だ」といって、俺は答えを再び求めた。

灰原は言った。

「彼の特殊能力を思い出してご覧なさい」

「特殊能力……？　ま、まさか……」

「ありえない話じゃないわ」

「おいおい、嘘だろお……それが真実なら、あいつ、とんでもない行動派じゃないか……」

「何をわかりきったことを」

よく知りもしない組織に入ろうとしたのも、事件を解決したのも、全ては怪盗キッドに近づいたため。突発的な行動は、絶対に考え練られたものじゃないだろう。あいつの行動は全て。

「勘、かよ……」

場所は変わって、直也の部屋。彼は破損した自転車用のヘルメットを小脇に抱え、等身大の怪盗キッドのポスターを見上げていた。

「少しでも、チャンスを多くするため」

直也はヘルメットを両手に持ち直す。

「いくら、勘に背くうとも、覚悟したことは、曲げない」

その目には、かつてのような濁りはない。

「キッド。お前に、会ってやる」

あるのは、純粋な覚悟だけだった。

勘。

ココカラアトガキ

ここまで作品をご覧いただき、誠にありがとうございました。これにて、『勘』は完結とさせていただきます。

理由は、ここまでしか書いてないからです。あと、キリがいい。

この先は少年探偵団絡み、怪盗キッド絡みの事件に少し顔を出す程度で、直也くん自身はきつと、「僕より幼い子達の成長を見届けないとだよね」とか考えて、あまり手出ししないことでしょう。危険と勘がお告げすれば、相応の行動はします。あと、コナン君の行動はよく監視しています。（小五郎さんポジション）

残りのお話は、ぜひ、皆様の脳内で保管していただけたら、幸いです。また、次の機会にお会いしましょう。

それでは、また、次の機会にお会いしましょう。